

第4章

総合大学における学びへのアプローチ

法律の限界を考えるのも法学

民主主義を諦めるわけにはいきませんが、間違ふことのない人などいませんから、皆に選ばれた人たちが皆のために話し合って定めたり変えたりする法律にも、やはり限界があります。近年の具体例で考えてみましょう。

法科大学院 教授 倉田 玲



子どもを仕分ける法律の限界

近年の話です。最高裁判所の大法廷は、2013年9月4日、民法という法律の一部が日本国憲法に違反していると決定しました。おなじみのとおり、憲法の第98条第1項に、「この憲法は、国の最高法規であつて、その条規に反する法律……の全部又は一部は、その効力を有しない」と定められていて、第81条に、「最高裁判所は、一切の法律……が憲法に適合するかしないかを決定する権限を有する終審裁判所である」と定められているのですが、この権限を発動して憲法の番人が法律の規定を無効と判定したのは、わずかに9回目のことです。

最高裁により違憲無効とされたのは、民法の第900条第4号という条文に含まれていた規定です。この条文には、親を亡くした子どもたち「各自の相続分は、相等しい」という原則とともに、「ただし、嫡出でない子の相続分は、嫡出である子の相続分の二分の一」という例外も定められていました。ただし書の嫡出子とは、婚姻している法律上の夫婦の子です。内縁と呼ばれる事実上の関係などから生まれた婚外子は、非嫡出子とも呼ばれてきました。第902条第1項の「遺言」があれば話は別ですが、現実にはないことが多く、そのような場合をバックアップしている法律の規定どおり遺産を配分するほかないというときにも、第882条に定められているとおり、「相続は、死亡によって開始する」ことになります。

憲法の第14条第1項に、「すべて国民は、法の下に平等であつて……差別されない」と定められていますが、非嫡出子の法定相続分が嫡出子の半分というのは、不合理な差別に該当するというのが最高裁の判断でした。もとより自業自得ではありえない不利益を被り、そのような法律の存在から派生する差別意識にも晒され続けるというのは、第13条に、「すべて国民は、個人として尊重される」と定められているのにも反するでしょう。

1995年7月5日の大法廷の決定とは正反対の結論ですが、不断の検証が必要という観点から18年間の国内外の動向が綿密に検証され、判例が変更されました。もっとも、解決済の別件が蒸し返されるかもしれない不安定な状態にはならないようにという配慮から、事件の当事者たちより遅く2001年7月以降に開始された相続でも、すでに確定した事例には影響を及ぼさないという判断も明示されました。

翌日の全国紙の社説では、読売新聞が、「日本人の家族観の変化を踏まえた歴史的な違憲判断である」と歓迎しました。産経新聞は、「最高裁の判断が、国民の結婚観や家族観に誤った影響を与えるようなことがあってはならない」と警告しました。毎日新聞は、「最高裁が少数者の声に真正面から向き合ったことも評価できる」という論調でした。朝日新聞は、確定済の事案に遡って及ぶのを避けたのが「苦渋の選択」だと指摘しました。これら多岐にわたる論評は、単純明快な正解のない現実社会の問題であることを如実に物語っているでしょう。

参考文献

- 末川博(編)『法学入門〔第6版補訂版〕』有斐閣 2014年
 生田勝義ほか『法学ことはじめ』法律文化社 2015年
 市川正人・倉田原志(編)『憲法入門』法律文化社 2012年

民主主義を歪める法律の限界

これも具体的な話です。2013年3月14日、東京地方裁判所は、公職選挙法の第11条第1項第1号に、「成年被後見人」は「選挙権及び被選挙権を有しない」と定められていたのを違憲無効と判定しました。民法の第7条に、「精神上の障害により事理を弁識する能力を欠く常況にある者については、家庭裁判所は……後見開始の審判をすることができる」と定められていて、後見されることになれば、第9条ただし書の「日用品の購入その他日常生活に関する行為」を除き、自分ひとりでは法的な義務の発生する契約などの行為はできなくなるのが原則ですが、だからといって投票の資格もなくなるのはおかしい、というのが東京地裁の違憲判決でした。

この判決には、「憲法が、我が国民の選挙権を、国民主権の原理に基づく議会制民主主義の根幹として位置付け、国民の政治への参加の機会を保障する基本的権利として国民の固有の権利として保障しているのは、自らが自らを統治するという民主主義の根本理念を実現するために、様々な境遇にある国民が、高邁な政治理念に基づくことはなくとも、自らを統治する主権者として、この国がどんなふうになったらいいか、あるいはどんな施策がされたら自分たちは幸せかなどについての意見を持ち、それを選挙権行使を通じて国政に届けることこそが、議会制民主主義の根幹であり生命線であるからにほかならない」（判例時報2178号3頁、12頁）と述べられています。日本国憲法の公定英訳には、第15条第3項の「成年者による普通選挙」の部分が“Universal adult suffrage”と表示されていますが、選挙権ばかりでなく、およそ基本的人権であれば、誰にでも使い易くユニヴァーサルにデザインされ、ハンディキャップに関係なくバリア・フリーに保障されていなければなりません。

選挙権の場合は、たしかに、成年者に限定されます。けれども、「選挙権を行使するに足る能力を欠く者を選挙から排除するという目的達成のためには、制度趣旨が異なる他の制度を借用せずに端的にそのような規定を設けて運用することも可能である」（13頁）とも述べていた違憲判決への対応は、もはや借用とは非難されない程度に「成年被後見人」規定をカスタマイズするのではなく、ましてやオリジナルな規定を考案するものでもありませんでした。7月21日の参議院議員通常選挙を間近に控えて、成年被後見人の選挙権の回復等のための公職選挙法等の一部を改正する法律が5月27日に成立、6月30日に施行されましたが、その第1条に明記されたのは、公職選挙法の第11条第1項第1号を「削除」というシンプルな対応策でした。こうして、古びた決まりごとが、また1つ消えました。

憲法の第43条第1項の「全国民を代表する選挙された議員」たちが第41条の「国の唯一の立法機関」として制定する法律は、たとえ文字通り国民の総意の結晶であるとしても万能ではなく、ここに紹介している2つの例に示されているとおり、不動でもありません。教育基本法の第7条に、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と定められていますが、ダイナミックなルールの世界を学ぶには、スタティックな真理を覚えようとしてばかりもいられません。正義の追求と秩序の安定が二律背反となることもあるような現実を見据えて、折り合いの付け方を考えるというのも新たな知見を創造する学問の1つです。

考えてみよう

- ・末川博『法律』（岩波新書、1961年）の末尾に、「法律がわれわれを包む空気のようなものでありまた空気の成分たる酸素のようなものであるとするならば、われわれは、いつも空気を清潔にして酸素を適当に保有するように努めなければならない。その空気を汚染したり酸素を収奪したりするものに対しては、これを排撃するためにたたかうことが、空気のなかに生きている人間の当然の務めではあるまいか」（189頁）と記されています。選挙のときに投票したり裁判所に訴えたりすることには、どのような意味があるでしょうか。
- ・日本国憲法を改正しやすいように改正しようとするには、どのような意味があるでしょうか。

決して当たり前ではない「当たり前」―「記念日」から読み解く「常識」の社会学

私たちの周りには「常識」があふれています。それらは、あまりに当たり前であるがゆえに、疑ってかかることもないでしょう。しかし、考えてみると、奇妙に思われるものも多いものです。ここでは、一見、「歴史の勉強」のように見えるかもしれませんが、「終戦記念日」に関する「常識」について、社会的に考えてみましょう。



産業社会学部 教授 福間 良明

■ 8月15日は「終戦の日」？

8月15日が「終戦記念日」であることは、多くの人々が知っているでしょう。でも、少し考えてみると、ちょっと意外なことも浮かびあがるものです。「終戦」の日が知られているとしても、「開戦」の日はどれだけの人々がすぐに思いつくでしょうか。歴史好きの人であれば、マレー半島上陸や真珠湾攻撃で「太平洋戦争」が(1941年)12月8日に勃発したことを知っている人もいるかもしれませんが、しかし、「終戦」の日を知っている人の数に比べると、この日を知っている人の数は、ぐっと少なくなるのではないのでしょうか。さらに、中国との戦闘(日中戦争)が勃発した(1937年)7月7日、その淵源とでも言うべき満州事変が勃発した(1931年)9月18日となると、すぐに思い出せる人は少ないと思います。

もっとも、知識の有無を問題にしたいわけではありません。そうではなく、なぜ、「終戦」の日が知られているのに、「開戦」の日が知られていないのか。考えてみれば、不思議なことではないでしょうか。

また、8月15日が「終戦記念日」と言ってよいかといえば、それもやや怪しいものです。ポツダム宣言の受諾、つまり対外的に無条件降伏を発表したのは8月14日、正式な降伏文書の調印(いわば、外交的な終戦の「契約」の締結)は9月2日です。8月15日はラジオ(玉音放送)で国内向けに、すでにポツダム宣言を受諾したことを発表した日でしかありません。だとしたら、なぜ8月15日が終戦記念日になったのでしょうか。見方によっては、8月14日や9月2日になってもよかったのではないのでしょうか。実際、戦後の初めの頃は、8月14日や9月2日が「終戦(降伏)」の記念日とみなされることが多く、8月15日が終戦記念日として言及されることは、あまり多くありませんでした。

では、いつから、そしてなぜ、8月15日は「終戦記念日」として「発見」されるようになったのでしょうか。

■ 「終戦記念日」の発明とラジオの機能

新聞記事や放送番組表を見てみると、それが一般化してくるのは、戦後10年あまりが経過してからです。終戦後の約7年間は、日本はGHQの占領下にありました。民主主義体制が敷かれるようになったとはいえ、GHQによる言論統制が行われており、国家主義や占領軍批判などの議論は抑え込まれていました。このことは、検閲(統制)されるだけではなく、日本のメディア自身が、自分たちの言論を自主検閲する傾向をも生み出しました。GHQからクレームをつけられたり発禁処分を受けたりすると、企業としての活動が著しく制約されるためです。こうしたこともあってか、占領期には、ポツダム宣言受諾(8月14日)や降伏文書調印(9月2日)といった「敗戦」「降伏」(アメリカの側からすれば「戦勝」)を連想させる日が「記念」されがちでした。必然的に、占領の終結は言論状況に変化を生み出しました。そのなかで「発見」されたのが、8月15日だったわけです。

参考文献

- 佐藤卓己 『八月十五日の神話―終戦記念日のメディア学』 ちくま新書 2005年
 福間良明 『焦土の記憶―沖縄・広島・長崎に映る戦後』 新曜社 2011年

それにしてもなぜ、8月15日が選び取られたのでしょうか。そこで大きかったのは、ラジオという「メディア＝器」の働きです。昭和20年8月15日の正午、天皇の声による終戦のメッセージがラジオ放送で国民に伝えられました。天皇の肉声が公式に放送されるのは初めてだったこともあり、多くの国民は姿勢を正して、これを「拝聴」しました。このことは、ラジオによって媒介(mediate)されながらも、天皇が司る「終戦の儀式」に、国民がバーチャルに参加した感覚を生み出しました。これはあくまで、ラジオという「メディア」によって初めて可能になるものでした。同日の新聞にも、玉音放送で天皇が読みあげた「終戦の詔書」が掲載されました。しかし、同じ「内容」ではあっても、お茶でもすすりながら手にするような新聞では、「儀式」への参加感覚は生まれようもないでしょう。そもそも、新聞とは異なり、ラジオは全国一斉にまったく同じ内容を伝えるメディアです。「自分だけでなく国民すべてが終戦の儀式に参加していたにちがいない」という感覚は、こうしたなかで生み出されました。

そして、天皇とともに涙した体験は、占領終結後、数年を経て、初めて思い出されるようになりました。それは降伏文書調印などに比べると、直接的に「敵への敗北」を想起させるものではありません。かつての「終戦の儀式への参加感覚」は、占領終結という戦後の社会変化(言論状況の変化)のなかで「発見」され、「終戦記念日」としての8月15日が「発明」されたのです。

II 「常識」によって見落とされるもの

毎年夏に多く放送されるドキュメンタリーでは、「終戦」を象徴するものとして、玉音放送に涙する人々の映像がしばしば映し出されます。それは、あたかも当時の日本国民全体の体験であったかのように思われがちですが、必ずしもそうとばかりも言えません。

たとえば、沖縄では基本的に玉音放送を聴取することすら、不可能でした。地上戦が展開された沖縄では、放送施設や印刷設備が物理的に破壊されていたため、戦争末期にはマスメディア自体が存在しませんでした。終戦時に玉音放送が可能であった日本本土は、沖縄から見れば、まだしも恵まれた状況だったのかもしれませんが。その後、沖縄は27年にわたり米軍統治に置かれました。終戦7年後に占領が終結した日本本土とは全く異なる戦後を沖縄は歩んだわけですが、その沖縄では8月15日には日本本土とは異なる意味が込められていました。日本とともに戦いながらも、本土から切り捨てられているかのような状況を問い直そうという意図が、しばしば沖縄の8月15日の論調には垣間見られました。

このように、さまざまなニュースやドキュメンタリーを(場合によっては教科書も)通して知っている「知識」であっても、よく考えて見れば奇妙なものも少なくありません。ましてや、日常生活のなかでの「常識」「当たり前」であれば、さらに不可思議なものを見出すことができるでしょう。

ただ、大事なことは、その「常識が正しいかどうか」ではありません。なぜ、そのような「常識」が選び取られているのか。いつからそれが「常識」になったのか。それを考えることから、見えてくるものも少なくないでしょう。

そこで「その常識は間違っている」と詰問することはある意味、簡単です。しかし、そのような「常識」が受け入れられていることには、往々にして何らかの理由や背景があるものです。それを問うことで、根底にある社会の歪みや問題点(あるいは可能性)を考えることができるのではないのでしょうか。

「常識」が社会的に創られたものであることは、多いものです。そのからくりや要因を解き明かし、「常識」を支えている社会や人々の営みを考える。産業社会学部のコアである社会学には、「常識破壊」の意外さと逆説を読み解く面白さがあるのです。

III 考えてみよう

- あなたの周りに、どのような「常識」があるのか考えてみましょう。
- その「常識」には、どんな「ヘン」なことがあるのでしょうか。
- その「常識」は、なぜ社会的に「当たり前」と思われているのでしょうか。

無関心という「暴力」と闘う国際関係学

世界の急速なグローバル化によって、様々な問題が複雑に絡み合って深刻化しています。その解決に向けたアプローチを発見・議論・普及すること。ここに国際関係学の真骨頂があります。



国際関係学部 教授 本名 純

Ⅱ グローバル化と私たちの日常

「アメリカ横断なんてフツ〜」。先日、学食で食べていて、ふと隣から聞こえてきた会話の断片ですが、一瞬、動揺しました。「ええっアメリカ横断が普通なのか？金も時間もかかるだろ。今の学生さんはスゴイな…。」しかし、平静を取り戻して、ふと考えてみると、アメリカ横断はさておき海外旅行はもう多くの学生の日常になっているのかもしれない。

海外旅行に限らず、様々なことが今や日常になっています。コンビニで「ツナ入りおにぎり」（昔はなかった！）を買うことや、毎月のように新発売のカップラーメンがコンビニの店頭で並ぶこと、流行のブランドTシャツがお買い得になっていること、スマホを時々「機種変」すること、などなど、みんな「フツ〜」になりました。

この日常は、いわゆるグローバリゼーションの産物です。情報通信技術の発展と、交通インフラの世界的な拡大によって、私たちの経済は他国との相互依存関係を深め、便利で美味しく質のよいモノを、効率よく安く手にいれることができる時代になりました。インターネットやケーブルテレビの普及で、世界各国のニュースやトレンドが瞬時に伝えられ、教室のなかでも電車のなかでもトイレのなかでも、そういう情報へのアクセスが簡単にできるようになりました。世界と一体化するなかで、私たちの生活は便利になり、飽食になり、気軽に外国とつながるようになっていきます。私たちはグローバル化時代の恩恵を日常的に謳歌していると言えるでしょう。

Ⅲ 「見えない声」と「悪いやつら」

その時代を生きる私たちには、どのような責任があるのでしょうか。国際関係学は、その責任を見つめ出す大事な学問です。それは、グローバル化時代の世界を底辺で支えている人たちの日常に目を向ける視座を提供するからです。「他国との相互依存」という言葉はとても中立的に聞こえますが、一方の国の繁栄が他国の人々の大いなる犠牲の上に成り立っていることも「相互依存」の実態である場合が多々あります。便利で安く美味しいものが提供される、しかし、その影で多くの人たちが苦しみ悲鳴を上げているとしたら、私たちは今の日常を見直そうと考えるはず。その「見えない声」は世界中に存在します。それに耳を傾けることができるのは国際関係学だけです。

海外旅行が手軽になったため、日本からも沢山の「小児愛好家」が児童買春を目的に東南アジアに押し寄せています。児童のニーズが高まる中、孤児院から子どもたちを誘拐して売春宿に売り飛ばす「悪いやつら」のビジネスが大繁盛しています。この子達にとっては、グローバル化は悪魔の到来でしかないはずです。

参考文献

アマルティア・セン『グローバリゼーションと人間の安全保障』日本経団連出版2009年
 中村まり・山形辰史(編)『児童労働撤廃に向けて 今、私たちにできること』(アジア研選書)アジア経済研究所2013年
 ダニ・ロドリック『グローバリゼーション・パラドクス 世界経済の未来を決める三つの道』白水社2013年

ツナおにぎりに使われるツナ缶も、外国で大量に生産・輸出されるものをよく使います。タイのある水産加工会社は、ツナ缶の国際的な価格下落競争で優位に立とうと、大幅なコストダウンにつながる労働賃金の削減を考え、それを人材派遣会社に相談したところ、その派遣会社はミャンマーからの難民や違法移民に重労働をさせるという案にたどり着きました。海上で何ヶ月も過酷な奴隷労働を課され、逃げ出そうものならサメの餌にすると派遣会社の悪いやつらに脅され、地獄を見ている人たちがいます。彼らの悲鳴が安いツナ缶のコストです。

カップラーメンも、日本ほど手を替え品を替えの国も珍しいですが、製品には必ずアブラヤシから作られるパーム油が使われます。今や世界の植物油貿易の7割を占めるパーム油のブームの理由は、その安さにあります。その主要原産国はインドネシアとマレーシアですが、前者では熱帯雨林のジャングルを切り開いて広大なアブラヤシ農園を各地で開拓してきました。そして、その開拓現場では悪徳伐採業者による無秩序な森林伐採と木材密輸がはびこり、生活圏を奪われたオランウータンや象たちが無残にも惨殺されています。ここでも、悪いやつらの暗躍に悲鳴するローカル社会の日常が存在します。

Tシャツだって同じです。ある有名ブランドのTシャツは、製造コストの削減のためにカンボジアの縫製工場に仕事を発注しています。労働賃金が安いのが理由です。同国の縫製産業の伸びは世界が目にするところですが、女性労働者たちの過酷な実態も多数確認されています。地方から「儲かる」と言われて出稼ぎにきた若い女性労働者たちが、工場の重労働に絶えきれず逃げ出すものの、田舎に帰れないので工場周辺の売春宿に「転職」する実態も報告されています。ここでも「見えない声」が、グローバル化の底辺で私たちの日常生活を支えている構図が浮かんできます。

スマホの普及も、世界の裏側で悪い奴らを助長しています。スマホやタブレットの小型化に大きく貢献してきたのがリチウムイオン・バッテリーの開発です。ハイブリッドカーにも使われる、このリチウムイオンには、コバルトという金属鉱物が不可欠ですが、そのコバルトの世界最大産出国は中央アフリカのコンゴです。長引く武力紛争で国家が脆弱なため、コンゴでは採掘業者の違法行為が後を絶ちません。特にひどいのが、児童を動員して手掘りで長時間の採掘を行わせている実態で、約4万人の子どもたちが、この奴隷的重労働を強いられている姿が報告されています。それで集めたコバルトが、バッテリーとなって、私たちもよく知るスマホメーカーや自動車メーカーの製品として店頭に並んでいます。

■ 無関心という暴力

なんだか世界は理不尽なことだらけです。今に始まったことでもありません。私たちが声を挙げて、世の中がすぐ変わるわけでもありません。でも、私たちが、こういう現実を懸念し、なぜ問題が起きるのか、どうすれば解決できるのかを勉強することは無意味なことでしょうか。決してそうではありません。グローバル化時代に私たちとつながっている「向こう側の人たち」の見えない悲鳴に耳を傾けることは、彼らに対する暴力に加担したくないという意思表示に他なりません。そう思う人たちが少しでも増えていくことに「未来を拓く」希望と光があります。無関心こそが現状維持を促す暴力です。私たちは、その暴力と闘うためのツールとして国際関係学を皆さんと共有していきたいと考えています。

■ 考えてみよう

- 私たちの身の回りで、日常的に安くなった輸入品が沢山ありますが、それらがどのようなルートで入ってくるのか、その過程で安価になる仕組みがどこにあるのかを調べ、その功罪を考えてみよう。
- グローバル化は、各国の政治、経済、社会、文化に大きな衝撃を与えてきました。その衝撃は何をもたらしているのでしょうか。各地の事例を取り上げ、人々の暮らしを見つめ、私たちの進むべき道を考えてみよう。

花を愛でること

文学部における学びを人文学と呼びます。人文学とは、人と対話し、人に共感し、人を理解することを通じて、「人間とは何か」ということを、未来に向かって問い続けていく学問なのです。



文学部 教授 井上 充幸

花はなぜ美しいのか

「長雨が上がり、秋空が広々と澄み渡った。みぎわの蘭がまた花をつけ、清らかな香りがかすかに、しかし尽きることなく漂ってくる。隣に住む目の不自由なおばあさんを招いたところ、得意の琴を持参してきてくれた。ともに香りを味わいつつ、典雅な演奏を楽しんだ——」今から400年ほど昔、中国の浙江省の嘉興という街に暮らしていた文人が、日記の中に記したなにげない一節です。初めてこれを読んだとき、私はなぜかしみじみ心打たれました。フランスのパリのバガテル庭園で、白い杖をついた老婦人が、夫に手を引かれながらバラの香りを静かに味わう姿を見て思わず涙した、という、ある作家の一文を思い出しました。花を愛でる心は、今も昔も、そして世界中どこでも変わりはないのだな、と思います。そして何より、親しい人とそれを分かち合い、共に楽しもうとする優しさこそが、花の美しさをひととき輝かせるのかもしれない、とも思います。

花を愛でることは、花そのものの美しさに心動かされることであるとともに、その花を美しいと感じる人の心のありように思いを致すことでもあるのでしょうか。そうだとすれば、私が実際にその花を目にしていなくても、その美しさを実感することはできるはずです。文章を通じて、書き手がそこに込めた思いを受け取り、さらにそれに共感することのできる私自身の心のありように気づく、そんな瞬間に出会えたことこそが、私にとって、ささやかながらもかけがえのない経験だったのでしょう。

過去からの声を聞くには

歴史研究とは過去の人々との対話である、と私は考えます。ですから、彼らと向かい合う際の心構えも、生きている人々と接する場合と基本的には変わりありません。たとえば、こうであるにちがいないという自分勝手な思い込みや、こうあってほしいという自分本位の願望をもって相手の話を判断してはならない、と思い知らされたことがありました。以前、冒頭に紹介した日記の著者が、親しい商人を指して「書画の友」と記している詩を見つけました。素直に読めば、両者の間には、書画の鑑賞と取引を通じて、士大夫と商人という身分の違いを越えた麗しい友情が存在していた、ということになり、そう解釈して論文を書きました。ところがある中国人研究者から、「友」には秘書や補佐官などの意味もある、との指摘を受けたのです。その解釈に立てば、両者の関係は、結局のところ主人と使用人であつたに過ぎず、話がまったく変わってきてしまいます。果たしてこの人物は、隣のおばあさんに本当はどんな態度で接していたのでしょうか。ちょっと考え直してみる必要がありそうです。やはり人間という一筋縄ではいかない存在が相手である以上、別のところに隠された本当の意図や、はたまた巧妙に織り交ぜられた嘘や悪意に到

参考文献

- 日高敏隆・白幡洋三郎(編)『人はなぜ花を愛でるのか』八坂書房 2007年
『アジア遊学』No.99 「特集 地球環境を黒河に探る」勉誠出版 2007年
大阪大学歴史教育研究会(編)『市民のための世界史』大阪大学出版会 2014年

るまで、それらをどう見分けて本音を引き出していくかの駆け引きも重要なのです。

また、図書館で文献を読むだけでなく、実地調査に出向き、自分の立てた仮説が正しいかどうかを現場検証することも必要な場合があります。私がかつて、中国西北の灌漑農業について調べていたとき、ある文献に「高さ100メートルの切り立った崖に横穴を穿ち、崖下を流れる川から水を引き上げた」と書かれていました。意味がよく分からず首をひねっていたところ、地理学の研究者から、該当する地点を撮影した衛星写真にカレズの存在を示す縦穴の列が写っている、という情報を得たのです。しかし、文献に横穴とはっきり書かれている以上、上空から見えるはずがありません。そこで現地に赴いて確認したところ、横穴は300年前に、縦穴は50年前に、それぞれ掘られたものであり、いずれも山を越えた川の上流地点から取水するために、特殊な工法で掘られた地下水路の痕跡であったことがわかりました。もちろん、かつて人々が命がけで難工事に挑んだ現場に立った経験も、私にとって大変に貴重なものでした。過去からの声を聞く上でもっとも大切なことは、相手の話の裏を取り、他の専門家の意見を取り入れつつ、聞き手である自分自身の経験値を上げていく、そうした地道な努力の積み重ねなのだと思います。

文学部での学びについて

文学部には多種多様な学びが存在しますが、そこに共通しているのは、人々との対話を通じて「人間とは何か」ということを根底から問いつづける姿勢だだと思います。そしてそれこそが、「人文学」と呼ばれる学問のあり方なのでしょう。「人に話を聞かせてもらうことは、その人の人生を分けてもらうこと——」私の尊敬する文化人類学の研究者は、フィールド調査で出会った一人ひとりの心に寄り添う中で得た実感を、そう表現されました。これに倣えば、歴史研究もやはり、過去の人々の声に耳を傾け、かれらの人生の一部なりとも追体験することなのかもしれません。いずれにせよ、人文学の目的とは、過去の人たちの経験や今の私たちの経験しつつあることを、まだ見ぬ未来の人々と共に分かち合うことにある、と考えます。

ではなぜそのような迂遠なことをやっているのか、と疑問を持たれる方もおられるでしょう。それは、人間の持つ理不尽で予測不可能な部分、言い換えれば生きてあることの不思議さについて、自分自身の体験を通じて得た実感そのままに、まるごと伝えていければ、という思いがあるからこそだと思います。もちろん、研究成果をまとめるためにデータを整理していく過程で、こぼれ落ちていくことは無数にあります。そしてそれらは、一般には何の役にも立たないこと、少なくとも今すぐ役に立つ結果に直結しないことに違いありません。ですが、細部に宿るとされる不可思議な何者かに対する尽きせぬ興味こそ、人文学の醍醐味であることも、また確かなのです。

あらゆる事象がことごとく数値化され、一元的な価値の元で体系化されていく中で、それでもそこからこぼれ落ちていかざるを得ない何者かをいとおしむことは、「非科学的」と非難されるのかもしれませんが。それでもなお、その何者かの中にこそ、未来へのかすかな希望を託することができると信じたいのです。花を愛でる心を持ち、いつか花開くことを祈りつつ、種をまくこと。文学部で人文学を学ぶ意味とは、つまりそういうことなのだと思います。

考えてみよう

- ・人と対話するときに、一番大事なことは何だと考えますか。
- ・「文学部での学びは何の役に立つのですか」と質問されて、あなたはどうか答えますか。

日本のポップカルチャー外交と映像産業の競争力

グローバル時代における日本の国際競争力と、複雑化する日本の外交が現在課題となっています。この中で注目されるのが、「ポップカルチャー外交」です。そして日本の映像産業は中でも中核的な役割を果たしてきました。モノづくりの心と、匠の技で発信された映画、アニメ、ゲームなどのコンテンツは世界を魅了し、正に日本と海外とをつなぐ言語の壁を超えた共通体験として存在しています。



映像学部 教授 中村 彰憲

■ 現在まさに問われる「経済大国日本」と複雑化する日本の外交

従来、日本の国力は、製造業、とりわけ、自動車産業や半導体産業、並びに電気機器産業の国際競争力で測られてきました。「メイド・イン・ジャパン」の商品が世界を席巻し、79年にはハーバード大学教授のエズラ・ヴォーゲルが執筆した『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が刊行されベストセラーになっています。同時に、ジェームス・C・アベグレンによる『日本の経営』、ウィリアム・G・オオウチによる『セオリー Z』と欧米の研究者は日本の経営にも目を向けその競争力に着目しました。ですが、バブル崩壊とその後の長期に及ぶ日本経済の低迷、並びにそれを前後して台頭するサムソングループをはじめとした、韓国チェボル（財閥）や、ハイアールをはじめとした中国企業の台頭により、日本製造業における国際競争力や経済大国としてのリーダーシップが改めて問われるようになりました。また、外交についてもイデオロギーや歴史認識の違いによって解釈が変わりうる複雑な課題が重なり、一筋縄ではいかななくなっています。

このような中で、従来にも増して注目されるのが「日本の文化」を媒介とした外交、とりわけ、「ポップカルチャー」を媒介として推進する「ポップカルチャー外交」です。それには、映画、ゲーム、アニメなど日本の映像コンテンツも重要な役割を担っています。昨今、日本と政治的対立が続く中国ですら日本のソフトパワーの影響力は及んでいます。外国産アニメのテレビ放送を午後5時～10時まで禁止しているのに関わらず、2012年中国検索サイト最大手、百度の10大ホット検索ワードの1つとして、日本アニメのタイトルが選出された程です。

この日本のサブカルチャーに対する「世界の注目」は一昼夜にして築かれたものではありません。そして、これを実現した背景には、作家性を貫きながらエンターテインメントとしても成立する作品を作り続けた日本人クリエイターのモノづくりに対する意識があるのです。

北野(2005)は米国において日本映画が広く評価された時期を1952年としています。黒澤明による『羅生門』が全米で上映されたのです。従来、日本映画はアジアに対し興味のあるごく一部の人達によって受容されていましたが、『羅生門』は1951年のヴェネチア国際映画祭で上映され、同作はその年の金獅子賞を受賞することで多くの注目を浴びました。また、劇中の事件がそれぞれの登場人物の主観的視点から描かれるという物語技法が、「Rashomon Style/The Rashomon Effect」と呼ばれるほどの影響を与えました。以降、溝口健二、小津安二郎、そして大島渚、北野武らによる作品が高く評価され、日本映画は世界の映画界において一定のプレゼンスを得るようになりました。

一方、1954年に国内公開された『ゴジラ』が、米国人ジャーナリストを主人公としたドキュメンタリー風

参考文献

Kalat, D. A *Critical History and Filmography of Toho's Godzilla Series*. McFarland & Company, 1997.

北野圭介 『日本映画はアメリカでどう見られてきたか』 平凡社新書 2005年

草薙聡志 『アメリカで日本のアニメは、どう見られてきたか?』 徳間書店 2003年

Leonard, S. (2005) "Progress against the Law: Anime and Fandom, with the Key to the Globalization of Culture." *International Journal of Cultural Studies*. 8(3): 281-305

上村雅之・細井浩一・中村彰憲 『ファミコンとその時代』 NTT 出版 2013年

うに再構成された形で1956年『Godzilla the King of Monsters』として全米公開され人気を博しました。その後、シリーズ化された作品の多くが米国でも上映されたのに加え、70年代にはテレビアニメまで独自に制作、放送される程でした。90年代末には、ハリウッドで『ゴジラ』がリメイクされたのみならず、継続的に世界各地のテレビで放送される等、その後も一定の支持を世界中で得ています。50分の1スケールで精緻に作りこまれたミニチュアセットを、重厚感あふれる着ぐるみを来た演者が、体を張って演ずることで実現した日本独自のダイナミックな特撮映像表現が、多くの人を魅了したのでしょう。

日本のポップカルチャー人気の礎となったファンコミュニティ

同時に60年代中旬からは日本アニメが世界に向けて展開されました。草薙(2003)は1961年以降、東映動画による劇場用アニメ『白蛇伝』、『少年猿飛佐助』、『西遊記』などが米国で上映されるようになり、1963年に『鉄腕アトム』が放送された際は、全米各地で高視聴率を獲得し高い人気を博したと指摘しています。一方、ヨーロッパでは、ロボットアニメが日本から輸出された玩具とともに人気を博し、各国各様の形で、日本製アニメーションが浸透していきました。ただ、この段階では、いくつかの課題も残りました。ひとつは作品の改ざんです。主要登場人物や作品タイトルが北米展開時に変更されました。複数の作品が無理やり1つのタイトルに再編集され、オリジナルと全く違った形で放送されたケースもあります。もうひとつは海賊版流通です。正規流通で展開されたアニメはごく僅かにとどまり、残りはファンコミュニティを中心に、ビデオテープのダビングなどを通して伝播しました。ただ、Leonard(2005)によれば、ダビングを通したコミュニティ間の交流が、ロコミ効果的役割を果たし、本格的な多チャンネル時代の到来を迎える90年代中旬において、日本アニメが海外で受け入れられるための礎になったと指摘しています。

日本と海外を繋ぐ言語の壁を超えた共通体験

一方、日本コンテンツのビジネスとしての潜在力を表面化させたのが、任天堂によるファミリーコンピュータの世界進出です。同機が85年に北米展開を、87年からヨーロッパで展開した際、ハードとともに世界を賑わせたのが、日本製ソフトです。日本のアニメやマンガなどのポップカルチャーの影響を多大に受けたソフト群が、ハードの魅力で引き寄せられたユーザーを更に魅了しました。つまり任天堂のゲーム機は、それ自体が「Cool Japan」のプラットフォームであったと言えます。これらの現状もあり、日本のポップカルチャー産業におけるゲーム産業の外貨獲得金額の高さは現在でも続いています。ただし、映画、アニメなども世界に大きな影響を与えたであろうことは20万人を動員するフランスのJapan Expoを皮切りに、世界各国で展示会が開催される事実を見れば明らかでしょう。つまりこれらの映像体験は、日本と海外をつなぐ共通体験とも言えるのです。そしてこれらは「モノづくり」に対するこだわりと「匠の心」を持つ作り手の絶え間のない努力の元、生み出されました。

ブロードバンドの普及により、「ポップカルチャー」を通じた国際交流の敷居は格段に低くなりました。各国の事情に合わせて、作品そのものを大幅に改ざんするということも減ってきているばかりか、国内で放送された作品が数日後には世界に配信されることも多くなっています。インターネットへの違法配信といった課題が残るものの、作品の名シーンをパロディ化した写真が動画像共有サイトに投稿されるケースも多く、それが共感を生み出すとあっという間に伝播するという現象も見受けられます。つまり、「文化交流」と堅苦しく考えるのではなく、気軽に自らのスタイルに合わせた草の根レベルの国際交流が可能になってきたのです。

すでに国家として成熟期をむかえている日本にとって、これらの「文化資産」を如何に国際交流の「媒体」へと転化していくのがこれからは問われることになるでしょう。

考えてみよう

- 70年代から80年代にかけて日本の国際競争力が世界において注目的になった理由は何でしょうか。
- 日本の「ポップカルチャー」の中で映像産業が果たした役割はどのようなものでしょうか。
- 日本の「ポップカルチャー」が外交手段として注目されるようになった理由は何でしょうか。

経済学を学んで何がわかるのか

経済学は、人が損得を効果的にコントロールする方法を考えるものではありません。人々がそうやって行動したことが、世の中全体で無意識に合成された結果もたらされる法則を探るものです。福祉の財源の問題や、賃金と利潤の対抗の問題も、おカネの取る取られるのレベルではなく、世の中全体の仕事の無意識の割り振りの問題ととらえることができるのです。



経済学部 教授 松尾 匡

■ 経済学と経営学の違いを問う問題

以前勤めていた大学では、卒業がかかった学生などのために、再試験の制度があったのですが、ミクロ経済学の担当をしていたとき、毎年こんな問題を再試験に出していました。「ちょっとでも安く売っている店があったら、多少遠くてもその店から買うという行動をみんながとることをどう思うか」というものです。

受験前のオープンキャンパスなどでは、よく「経済学と経営学はどう違うのか」と尋ねる人がいるのですが、この問題は、4年間経済学部において、その違いがわかったかどうかを試すいい問題なのです。

「ちょっと安く買えるからと言って、時間的費用やガソリン代などを余計にかけて遠い店から買うのを選ぶのは合理的ではない」といった答えは、経営学の発想です。期待される正解は、「みんながこのような行動をとると、店側は競って価格を下げるので、全体として価格水準が下がる」というものです。

つまり、人間が意識的に損得をコントロールするための効果的方法を考えるのが経営学です。その意味では、政治学や軍事研究なども同じかもしれません。それに対して経済学は、そうやって人々が行動したことが社会全体で無意識に合成された結果を探るものです。それはしばしば、誰も意図しなかったような結果になります。

典型的な例の1つが、「貯蓄のパラドクス」です。不況で所得が不安になった時など、人々は各自貯蓄を増やそうとして、消費を切り詰めるかもしれませんが、しかし、みんながそんなことをした結果、モノが売れなくてますます景気が悪くなって、人々の所得が減り、各自の貯蓄がかえって減ってしまうことがあります。個々の企業が利益を確保しようとして、クビ切りや賃下げや節約をすると、それが全体で合わさって世の中の購買力を下げ、不況がますますひどくなって、企業の利益はかえって減ってしまうということも、このかん実際に見られたことです。

■ 高齢化の「負担」とは？

経済学を勉強することの意義は、このような世の中全体の連関を法則的にとらえる「発想力」が身に付くことだと思います。これは、私達のくらしに直結する経済の将来見通しをつけるためにも、選挙や世論形成で正しい経済政策を選ぶためにも必要なことです。

たとえば、少子高齢化で必要になる福祉の財源をどうするのかということが議論になっています。普通は、どこから税金をとるかや発想するにとどまります。これは経営学同様、人が意識的に何かをコントロールする方法の選択です。しかし、経済学を学ぶと、もっと深いところから問題をとらえることができるようになります。

参考文献

- 若田部昌澄 『本当の経済の話しよう』 ちくま書房 2012年
 若田部昌澄 『もうダメされないための経済学講義』 光文社 2012年
 松尾匡 『不況は人災です』 ちくま書房 2010年
 松尾匡 『図解雑学マルクス経済学』 ナツメ社 2010年

この問題は、経済学的には、少子化で少なくなる働き手のうちから、高齢化で必要になる介護や医療のための人手を、いかに確保するか、さらにその人達や高齢者の人たちが自身の消費する財を作るための人手を、いかに確保するか、という問題なのです。

財源などの手段の主張 (表面の議論)	福祉等の人手をどこから回すか (本質の議論)	人手が浮くプロセス
消費税増税	消費財を直接間接に生産していた人手*	消費支出減→その生産減
物品税の拡充	贅沢品や賭博などの産業に従事していた人手*	当該産業への支出減→その生産減
法人税増税 または 赤字国債で民間から借金	機械や工場などを直接間接に生産していた人手*	利潤減や利子率上昇→設備投資支出減 →機械や工場などの生産減
公共事業の削減	建設業などに従事していた人手	支出減で直接浮く
規制緩和で生産性向上	生産性の向上した財の生産に従事していた人手	価格低下→課税で需要増抑制→税収で 福祉支出

※これらの財を輸入する見返り分にあたる輸出財の生産に従事していた人手を含む。

注意すべきことは、これら「限られた人手をどう使うか」という選択肢は、すべて完全雇用を前提しているということです。失業者がたくさんいるならば、その失業者の分を高齢化で必要となる人手に(直接間接に)回せばいいだけで、どの部門の労働も減らす必要はありません。それは具体的には、日銀が無から作ったおカネを財源にして福祉支出すれば、誰に負担をかけることもなくもたらされます。

このように見れば、高齢化の負担問題というのは、実は、誰のどのような財への支出を減らすか、労働のような生産資源を各部門にどれだけ配分するのかという問題だとわかります。そこで根本的には、たとえば、設備投資のための財は今後どれほど要るかとか、大衆の消費を減らすべきかどうか等々といったことが議論されるべき論点だということがわかります。

■ マルクス経済学も同じ発想

戦後の日本の経済学には、ミクロ経済学やマクロ経済学などの、いわゆる「近代経済学」と呼ばれていた潮流と、マルクス経済学(この大学の経済学部では「社会経済学」と呼ばれます)との二大潮流があって、お互いに水と油のように相容れないものとされて対立してきました。しかし、今述べてきたような見方をするのではなく、本来両者は共通しています。

労働者の賃金上がり、その分資本家の利潤が下がったかどうかということをマルクスが書いています。賃金から買う生活必需品部門が膨らみ、利潤から買う贅沢品部門が縮小することだと言います。「搾取」というマルクス経済学独特の言葉も、単に特定の資本家が配下の労働者を低賃金でこき使うという意味ではありません。利潤から買う機械や工場や贅沢品などの財を作るために、世の中全体で見て、直接間接に労働が配分されているという意味です。その労働を、労働者みんながシェアしあっていると見るわけです。

このように、人々の様々な所得の配分や再配分(課税など)と、さまざまな最終生産物の生産と、さまざまな部門への労働などの生産資源の配分とは、互いに裏腹の関係として、つじつまがあった形で連関し合っています。常識的には各自のおカネを取る取られるといったレベルでしかとらえることができなかった問題が、このような世の中全体の人々の無意識の相互連関の中でとらえることができることに、私たちが経済学を学ぶ意義があるのです。

● 考えてみよう

- ・ 輸入自由化のもたらす影響について、いろいろな部門への労働配分の点から見ると何が考えられますか。経済全体が人手不足の状況と失業が多い状況とではどう違うでしょうか。
- ・ 広い土地が多いアメリカでは穀物を生産し、資本の多い日本では自動車を生産して、お互い交換しあうことになるのはなぜか。これについての経営学的な説明と経済学的な説明の違いを説明して下さい。
- ・ 東京オリンピックの需要創出効果が大きかった場合、その経済的影響について労働配分の点から見るとどのようなことが考えられますか。経済全体が人手不足の状況と失業が多い状況とではどう違うでしょうか。

スポーツと健康を科学する

スポーツ健康科学は、私たちが健康的で豊かに暮らすことを実現し、またスポーツ競技においてトップパフォーマンスを発揮するために必要な最先端の科学的知見を提供する分野です。本学部では、スポーツ・健康に関する4つのコースを総合的・学際的に学び、理論にもとづいて各分野・現場で実践できる力を養い、より楽しく関わることができる社会を実現していける人材を育てようとしています。



スポーツ健康科学部 教授 山浦 一保

社会とつながるスポーツ健康科学

いかに健康的で豊かな暮らしを送っていくかは、私たちにとって重要なことです。生活習慣に関わる健康の問題は、先進国のみならず発展途上国でも注目されています。我が国をみても同様に、スポーツ健康科学分野に関わる社会的要請はますます高まっています。

一方で、人類の限界に挑戦するスポーツ競技においてトップパフォーマンスを発揮するためには、最先端の科学的手法の確立・サポートが不可欠となってきています。また、総合型地域スポーツクラブ等の展開による地域単位での運動やスポーツ習慣の定着・継続もまた、喫緊の課題に挙げられています。そして、これらの健康やスポーツ課題を実践的に取り組むためには、スポーツや健康に関わる指導者を養成し、組織を専門的な観点から教育、マネジメントすることが重要です。

スポーツ健康科学部は、こうした時代の要請にこたえるため、また立命館学園の建学の精神(自由と清新)、教学理念(平和と民主主義)、立命館憲章“教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて信頼と連帯を育み、地域に根ざし、国際社会に開かれた学園づくりを進める。”を具体化するものとして設置されました。そして、「スポーツ」「健康」「グローバル」「リーダーシップ」をキーワードに、現在、本学部には、スポーツ科学、健康運動科学、スポーツ教育学、スポーツマネジメントの4つのコースが設けられています。これら4つの領域の理解を深め、社会の発展に貢献できる人材を育成すること、それがスポーツ健康科学部の教育理念です。

スポーツ健康科学部での学び

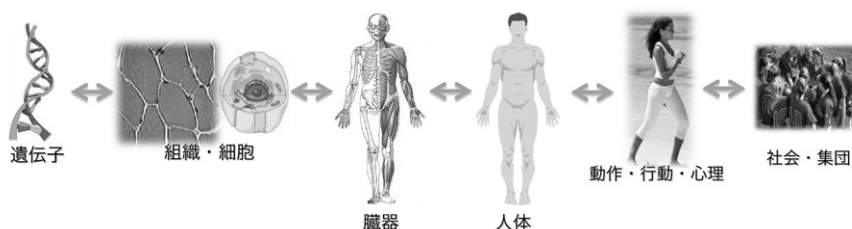
今、社会では、スポーツ選手の競技力を向上させていくこと、あるいは、健康の維持・増進に役立つ科学的な運動指導、心身を元気にするスポーツとの関わりのあり方、そこで生まれる感動や楽しさを普及させていくことが期待されています。このような社会的ニーズに応えるため、スポーツ健康科学部では、従来の体育学をベースに、関連する多様な学問分野と連携して、「スポーツ」と「健康」に関わる幅広い課題の解決に向けて取り組んでいます。これらの分野とは、医学、運動生理・生化学、保健衛生学、栄養学、理学、工学、経営学、教育学、心理学など多岐に渡ります。

たとえば、最新鋭の施設・設備(動作解析装置やMRIなど)を完備した、世界でも有数の学習・研究環境のもと、動作の解析や栄養面の指導など、さまざまな側面から「スポーツ選手の競技力」＝「スポーツパフォーマンス」を高めるために科学的な支援のあり方を考察していきます。それは、一般の方にも応用できるようなトレーニングとその効果のメカニズムの追究にも発展・展開させていきます。

参考文献

- 永井洋一 『スポーツは「良い子」を育てるか』日本放送出版協会 2004年
 田口貞善・矢部京之助・伊坂忠夫(編) 『スポーツサイエンス入門』丸善 2010年
 玉木正之 『スポーツとは何か』講談社 1999年

厚生労働省は、2020年度から75歳以上の後期高齢者を対象にした「フレイル健診」を導入しました。そういった現場で高齢者の健康や



介護予防のための運動・栄養プログラムをエビデンスにもとづいて提案し、社会的なニーズに応じていくことが重要になるでしょう。また、肥満やメタボリックシンドロームの予防を目的に、遺伝子的要因および運動による効果について科学的に分析し、得られた知見をもとに科学的な支援のあり方を考えていくことなども、働きざかりの中高齢者の健康づくりには重要になります。

こうした「スポーツ」と「健康」に関わる活動は、人の一生の活動そのものです。一人ひとりの意識を高め、また有効な情報を教え合って共有し、社会全体で「スポーツ」と「健康」に貢献できるマインドと実践力を養っていく必要があります。その実現には、教育現場、フィットネスクラブやスポーツ少年団、総合型地域スポーツクラブなど、地域でのスポーツ活動、企業、プロスポーツ、行政などの協力が必要です。運動嫌いの子どもや成人に運動することの楽しさを伝えるとき、あるいは高齢者になっても健康な身体を維持できるように運動の実践を促すとき、どんな教育手法が効果的なのでしょうか。また、自らが“する”だけでなく、“観る”“支える”など、「スポーツ」と「健康」との関わりは幅広く存在します。ファンや利用者などの顧客の拡大に向けて、どのように戦略を立て、人材を育成するとよいかというテーマは、実務的な視点からの学びにつながります。

このように、社会や私たちの生活と密接に結びついている分野の1つです。「理論と実践」を行き来しながら学びを深めていきます。実践の場は、オリンピックやWHO(世界保健機関)に代表されるような場面も含まれます。自分の意見や研究を世界に発信できるようになること、また、スポーツ健康科学部と米国の2大学院(East Stroudsburg University, Spalding University)との連携したプログラムにより、最短5年間で立命館大学と各大学院の学位を取得するとともに、ATC(米国公認アスレティックトレーナー)の受験資格を得ることも可能です。こうしたプログラムは、日本国内はもとより英語圏以外では初めての取り組みであり、グローバルな学びに挑戦することができます。

■ スポーツ健康科学の分野を拓き、社会を創る人材として

本学部で学んだ学生には、複雑になる社会の中で、何が問題なのかを見抜く客観的視点、その解決には何が必要なかを「理論」的に考えることができるようになってもらいたいと思っています。社会で起きている現象や物事の“本質を見極める”ことができるようになるには、幅広い視野が不可欠です。スポーツ健康科学部における総合的・学際的な交流、および幅広い専門分野を横断した学びは、その基礎力を築いてくれるはずです。

また、このような学びと基礎力は、オリンピック選手として高い競技力を発揮したり、教員、健康運動指導士、健康運動実践指導者としてスポーツの楽しさやすばらしさを伝えたり、スポーツ産業の発展に携わることや食品会社や製薬会社、商社の営業職や研究開発職などの現場、それ以外の未知の世界での「実践」にも活かされることでしょう。幅広く、理論に基づく学びを踏まえてグローバルに実践できる人材がこの学部から数多く育ち、これから先の社会を創造してくれることを期待しています。

■ 考えてみよう

- 運動をすると、どんないいことがあるでしょうか。
- Jリーグのチームの観客をより多く動員するためのアイデアを考えてみましょう。
- 保健体育の先生、あるいはスポーツの指導者には、どんな資質が必要だと思うか、考えてみましょう。

食マネジメント学部学び

おいしいものを食べることは、それはたのしいことです。では、いつ、どこで、誰と、どのように食べると、それはもっとおいしく、たのしくなるでしょう。そんな身近なことから「考えてみる」。それが「食」を学ぶ第一歩です。

食マネジメント学部 教授 朝倉 敏夫



食は、人類の生存と種の維持のため欠かすことのできない生命の営みです。そして、人類の食の歴史は、そのための資源や土地をめぐる集団間の争いの歴史であり、その解決のために新たな技術や制度を形成する歴史でした。そして今、人類社会は、地球の食料資源、その輸送や保存による環境への負荷、飢餓と飽食、食の安全・安心、孤・個食や摂食障害、伝統的な食文化の衰退など、食にかかわる社会的課題をかかえています。大学は、そうした課題を解決する研究と、それを担う人材の教育を要請されています。

「食」を「学問」にする

私たちは「食文化」という言葉を使っていますが、「食」の研究というと、これまでは農学部や家政学部で学ぶものと考えられてきました。しかし、1980年代に石毛直道によって、「食」を文化として研究する「学際的食文化研究」の旗揚げ宣言がなされました。この食文化の研究は、食にかかわる事柄のすべてが対象となります。つまり、食べものを作ることから、貯蔵すること、加工すること、運ぶこと、売ること、買うこと、調理すること、並べること、食べること、味わうこと、消化すること、までが食文化の範囲です。したがって、その学問分野は、農学、食品加工学、栄養学、調理学といった自然科学だけでなく、流通学、経済学、経営学といった社会科学や、文化人類学、歴史学、地理学といった人文科学にまで広がってきます。そこで、食とのかかわりのなかで、人間の生活環境としての社会を系統的・実証的に分析する社会科学、人間の生活の営みや文化活動を分析し理解する人文科学、食材から体内への取

り込みと認知までの一連の科学的な仕組みを理解する自然科学からの研究成果を視野に捉えながら、具体的に社会の発展へ還元する実践を可能とするための総合的な学びの体系を「食科学 (Gastronomic Arts and Sciences)」と呼ぶことにしました。そして、この総合的な学びの体系をマネジメント、カルチャー、テクノロジーの3領域に分け、経済学・経営学を基盤としながら、食に関する深い知見を培い、高度なマネジメント能力と実践的な行動力を備え、食の人类的な課題の解決に寄与できる人材を育成することが、「食マネジメント学部」の目的です。

「ガストロノミー・マネジメント

食マネジメント学部の英語名称は、ガストロノミー・マネジメント (Gastronomy Management) です。

まず、ガストロノミーですが、ふつうは美食と訳されます。語源的にはギリシア語の胃腸である「ガス

参考文献

- ブリアー・サヴァラン(関根秀雄・戸部松実訳)『美味礼賛(上、下)』岩波文庫、1967年
ブリアー・サヴァラン(玉村豊男編訳・解説)『美味礼賛』新潮社、2017年
ジャン・ヴィトール(佐原秋生訳)『ガストロノミ』文庫クセジュ、2008年

トロ』と、使用、慣習、法を意味する「ノミー」の合成語です。この言葉を学問的に整理したのは、ブリア・サヴァランです。1825年に刊行された『味覚の生理学』において「ガストロノミーとは、食生活を行う存在としての人間にかかわりあるすべてのものについての理論的知識である」と述べています。この本は、日本では『美味礼賛』と題して岩波文庫から出版されています。スマホのかわりに文庫本をもって、旅にでてみるのもよいでしょう。また、最近、玉村豊男が、かなり思い切った編集を加えた抄訳を出していますので、この二つの本を比較して読んでみるのもよいでしょう。ブリア・サヴァランは、この本のなかで「ガストロノミーは博物学、物理学、化学、商業、経済に、また医学、社会学に関連する」とも述べています。私たちの学部では、経済学、経営学を中心に、文化人類学、歴史学、地理学、栄養学、調理学、心理学など、さらに多彩な学問分野からガストロノミーにアプローチしていきます。

次に、マネジメントですが、ふつうは管理、経営と訳されます。しかし、その動詞形であるマネージ(manage)には、「困難なことをやり遂げる」、「どうにかして…する」という意味があります。たとえば、みなさんが野球の選手で、ランナー一塁という場面でバッター・ボックスに入ります。その時、監督はランナーを進塁させるためにバントやヒットエンドランといったサインを出すでしょう。野球では、状況によってさまざまな戦術があり、監督がそれを判断し、サインを出します。その監督の期待にこたえるために、選手は日ごろからバッティングの技術を練習しておかなければなりません。しかし、社会に出ると、仕事の現場では、監督がサインを出してはくれません。自分で判断しなければなりません。そのために、自分自身で判断し、それを成功させる力を養っておかねばなりません。私たちの学部では、食にかかわるさまざまな知識を得て、食にかかわる問題を「どうにかして解決する」知識と判断力と技術力をあわせもつ人材に育ててもらいたいと考えています。くわえて大リーグのベースボールを目指す人には、ル・コルドン・ブルーとの共同プログラムが用意されています。

世界をおいしく、おもしろく

問題の解決にあたって、自分自身が判断をし、それを成功させる人材になってもらうために、私たちの学部の教育では、データを収集し、そのデータを分析し、それを論理的に考え、そして人に正しく伝える力を培ってもらいます。データを収集するには、文献を読み、フィールドワークを行い、実験をする必要があります。データを分析するには、統計学の知識やパソコンの技術も必要です。さらには、海外の文献を読んだり、コミュニケーションをとったりするためには、外国語の能力も養わなければなりません。みなさんのなかには、統計学って数学がいるから「苦手」だなあ、外国語を勉強するのは「辛い」なあと、努力することを「渋る」人がいるかも知れません。でも、「苦さ」も「辛さ」も「渋さ」も、ほんとうの「おいしさ」を知るためには覚えなければならないのです。数学も外国語も、高等学校までの勉強とは違います。食科学を学ぶために数学や外国語を学ぶのです。それらは、自分が知りたいと思うことを知るための必要なツールなのだと考えてください。

人生は「甘い」だけではありません。人生のいろいろな味を知ることが、大人になることです。そして、食に関する文献を読み、フィールドワークや実験を通して、みなさんは新しいことを知る「おもしろさ」に気づくでしょう。新しい知識や人との出会いによって、楽しさ、おもむきの深さを知ることができるのです。

「世界をおいしく、おもしろく」、豊かな社会を作るために、みんなで一緒に、食を学び、食から学んでいきましょう。そして、学問の「おいしさ」と「おもしろさ」を味わって、味のある大人になっていきましょう。

考えてみよう

- ・人間にとって「食べる」とはなにか？
- ・「食べるもの」と「食べられるもの」のちがいはなにか？
- ・「食」をめぐる問題には、身近なことから地球の問題まで、どんなことがあるでしょうか？。

理工学部学び—持続可能な未来創造に向けて

急速な科学技術の進歩の中で我々は持続可能な社会の実現といった問題に直面しています。理工学部ではこうした課題に挑み、グローバル社会で中核となる人材を育てるための教育研究を強力に推進しています。

理工学部 教授 笠原 健一



遙か彼方の時空から

若いときに科学技術や歴史、文学などさまざまな事に興味を持ち、学ぶことは大事です。知的好奇心は創造力の原点であり、さまざまな分野での接触は後々、人間に豊かな広がりをもたらします。今から遡ること約7,200年前。牡牛座の角の近くにある1点からすさまじいエネルギーが放出されました。メソポタミア文明はBC3500年ごろであるのでそれよりも前の出来事です。その後、ギリシアにはBC2000～1200年にかけてミノア文明やミケーネ文明が興りました。しかしながらその天体ショーについての情報はまだ地球に届かず、当時の人々は誰も知らなかったわけです。牡牛座は冬の夜空で頭上に見える星座であり、大神ゼウスがエウロペを見初め、さらったときに変身した白牛の姿を形作っています。クレタ島から見える彼方の土地をゼウスは彼女の名前にちなんでつけ、それがヨーロッパの語源となっています。星座はギリシア神話にまつわる神々や生き物の名前がつけられています。ギリシア神話の物語の起源はアナトリア半島のヒッタイト人が鉄の精錬法を発明したBC15世紀頃に遡るが、口承で伝わっていた神話を文字の形で体系的にまとめたのはBC8世紀の詩人ヘシオドスです。ところで立命館大学の立命の由来は「孟子」の一説より来ていますが、孟子は戦国前期、紀元前370年前後に今の中国、山東省南部の小国家に生まれた儒学者です。春秋戦国時代には各国が乱立し国を統治する思想や人材が求められ、そこで活躍したのが孟子を含めた諸氏百家です。

そして時代は下ること1054年。日本で言えば末法思想がみちた平安末期のこの年の7月4日に牡牛座から放たれたエネルギーは地球によく到達し、客星として人々を驚愕させることとなりました。これが超新星SN 1054であり、その残骸が現在のかに星雲です。この超新星は昼間でも肉眼で見え、新古今和歌集や小倉百人一首で名高い藤原定家の「明月記」に記録として残されています。宇宙は137億年前、ビッグバンと呼ばれる大爆発によって誕生したと考えられています。宇宙のチリが集まってできた恒星の膨大なエネルギーは1,000万度以上の高温の中で起こるHからHeへの核融合によって生み出されています。質量が大きな恒星では核融合が進んで外側から中心に向かってC、O、Ne、Mg、Si、Feがつくられます。1核子あたりの結合エネルギーはFeが最も低いのでFeより重い元素は核融合のチェーンではできません。質量が太陽の10倍以上大きな恒星では、星の内部が燃え尽きると重力崩壊を起こし、中心部ではクーロン力を減らそうとして電子、陽子は中性子の集まりとなり、縮退圧と平衡になるまで進行します。そして半径は10km程度、密度は $1,011\text{kg/cm}^3$ と猛烈な値になり、外部はそこに向かって自由落下し、衝突することで大爆発が起こります。かに星雲の中心にある中性子星は33ミリ秒の周期で強力な電波やX線をパルス状に発しています。大爆発で吹き飛ばされた原子核では猛烈なエネルギーで中性子がベータ崩壊を起こし、電子と陽子に変わるプロセスが生じます。それによってFeより重い元素が僅かにつくられます。そのため宇宙に存在する元素は一般的に原子番号が軽いものほど多く、そこから生まれた我々の体を構成する元素も概ね、これを反映しています。

参考文献

小谷野敦 『日本史のための世界史入門』新潮新書 2013年

吉田たかよし 『元素周期表で世界はすべて読み解ける』光文社新書 2012年

■そして今

時代は更に下って20世紀前半。科学分野における最大の進展の1つは量子力学の確立にあります。量子力学はそれ以前のニュートン力学やマクスウェルの電磁気学では説明できない現象の発見から生まれてきました。そのきっかけは溶鉱炉にあります。19世紀初めの溶鉱炉の発明で鉄の生産量は大幅に増加しましたが、当時は溶鉱炉の温度を測る手段が無く、溶解した鉄の色を基に温度を推定していました。しかし、これでは大雑把すぎます。そこで発光スペクトルから正確に温度を求めようとしたが、光を電磁波、あるいは単一エネルギーを持つ粒子として扱っては実際のスペクトルを説明できませんでした。光子のエネルギーが周波数に比例すればよいと考えたのがマックス・プランクです。20世紀の中頃にはトランジスタやレーザー等が発明され、その後、科学技術は急速に発展しました。そして現在では情報はインターネットによって瞬く間に世界に伝わり、ヒトやモノも大量交通・輸送機関の発達によって国境を越え、自由に動き回る時代となっています。しかしながらそれにともなって世界的な問題が出てきています。世界人口は70億ですが、2050年には90億人になると予測されています。資源やエネルギー、食料の供給は限りがあり、環境を維持しながら、持続可能な社会を如何に実現していくか。こうした地球規模的な問題が新たな問題として出てきています。

■持続可能な社会の実現に向けて

関西の総合大学の中で、最も長い歴史を誇る当理工学部は、「数学物理系」、「電子システム系」、「機械システム系」、「都市システム系」の4分野、9学科より構成されています。これらの学科では、地球温暖化防止への対応、効率的なエネルギー利用や資源の節約・再生、より高度な情報通信網の創出、高い信頼性を有する画期的な機械材料の実現、環境と共生可能な建築や都市・交通システムの実現、それらを支える数学や物理科学基盤の構築等々、地球規模的で互いに絡み合った諸問題の解決に向かって取り組んでいます。絶え間なく変化する市場ニーズに柔軟に対応していくためには、揺るぎない基礎学力の修得が土台となります。また論理的思考力や主体性、コミュニケーション能力といった基礎能力は学力を補完し、総合力を押し上げます。グローバル化の進展に伴って英語等の語学力の重要性が増していることは言を俟ちません。技術や社会の変化を察知し、その中にある本質を理解し、新しい価値を創造していくにはこうした力を育成していくことが基本となります。入学時の学力レベルは近年、多様化しており、理工学部ではこうした状況を鑑み、個に応じたテーラーメードな教育システムの構築を推進しています。また講義科目と実験科目の相互の連携を低回生時から密にし、実験科目は基礎能力を磨くような内容にする等のカリキュラム改革を行っています。英語は初年時だけでなく、継続的に学習できるようなカリキュラムにしています。また社会との連携を強化し、国や企業との共同研究を積極的に推進しており、このような場の中で先端領域の技術開発に直接的に触れることができます。こうした取り組みを通じて、個人個人が自信を持ち、グリーン・イノベーション等の産業のパラダイム・シフトに果敢に挑戦し、活躍していける人材を多数、輩出することを目指しています。

■考えてみよう

- 17世紀の初めにケプラーによって発見された惑星の運動に関する知見はニュートン力学にどのような影響を与えたか調べてみよう。ニュートン力学は数学的に洗練された解析力学へと発展していくが、その歴史や時代背景も調べてみよう。
- 物体からはその温度によって決まる電磁波が放射されているが、それがどのような周波数依存性を持っているか調べてみよう。人や太陽、宇宙から放射される電磁波の最大周波数(または波長)はどのくらいになるか調べ、携帯電話に使われている電波と比較してみよう。
- 持続可能な社会を実現するためにどういった技術や社会システムが必要か考えてみよう。

社会で活躍できる情報技術者になる

コンピュータ囲碁、自動運転車、スマートフォンのゲームなど、情報通信技術が急速に発展してきています。情報通信技術を使って、社会の課題を解決できる人材の育成が情報理工学部使命です。

情報理工学部 教授 山下 洋一



情報通信技術への注目

2015年以降、情報通信技術(Information and Communication Technology : ICT)への社会からの注目が急速に高まり、マスコミなどでも華々しく取り上げられています。ここでは3つ、すなわち①コンピュータ基、②自動車の自動運転、③コンピュータゲーム、を取り上げて、学ぶべき点を考えてみます。

コンピュータ基については、Deep Learning(深層学習)という人工ニューラルネットワーク(ANN)技術の一種を用いたプログラムが世界トップクラスの棋士と対戦して勝ち越したというものです。ANNの考え方自体は1980年頃に提案されていますが、近年、大規模な計算ネットワークを大量データで学習することが可能になり、非常に高い性能を示すことで注目を集めています。人間が気づかないパターンをANN自身で発見する能力もあります。多方面への利用が期待される有望な技術ですが、ANNが何を学習したのかを人間が知ることが難しく、誤った学習がなされたときの修正が難しいという課題もあります。課題があるにせよ、人間の能力に近づいたICTと人間の関係は考えるべき重要な問題です。将棋でも、コンピュータが人間に勝つ事態が起きています。

自動運転車については、上記のコンピュータ基で世界を驚かせた世界的な検索エンジン会社が参入してきた点が注目を集めていますが、日本がいち早くこの分野の研究を手がけ、世界をリードしてきたことは見落とされがちです。実用化に向けての大きな課題は事故時の責任の在り処で、社会として大いに議論し、合意を得ていく必要があります。2016年には、高速道路に限って自動運転を行う車が日本で発売されました。2020年には一般道で自動運転タクシーを実用化する計画もあり、技術の発展に対して社会の側の反応速度が求められています。自動運転は、あらゆるモノにセンサを付けてデータを取得し、データに基づいて自動制御するCPS(Cyber Physical Systems)という技術の一種です。

コンピュータゲームとしては、スマートフォン上で現在位置に基づいてアニメのキャラクターを街中で探す日本製のゲームが世界的に流行した現象が挙げられます。このゲームには拡張現実感(Augmented Reality : AR)と呼ばれる技術が使われています。ARは、現実世界と仮想世界とを結合する技術です。特記しておきたいのは、ARが日本、特に本学部が強い技術だということです。忘れてほしくないのは、このような技術が一朝一夕にできたものではないということです。ARのベースにある仮想現実感(Virtual Reality)は1960年代後半に研究が始められ、ARという用語が生まれたのは1994年です。研究者の長い間の熱い思いが今に結実しているのです。

情報通信技術と社会

前述のように、ICTが社会に与えるインパクトは急速に大きくなってきています。そもそも、ICTがなければ皆さんの日常生活は成り立ちません。規模の大きなところで言うと、発電システムの制御、鉄道・高速道路・航空などの交通システムの監視、上下水道の運用などはICTがなければ実現しません。身近なところでは、SNS(Social Networking Services)と呼ばれるLINE、facebook、Twitter、Skype、

参考文献

情報処理推進機構「IT人材白書2019 人から始まるデジタル変革～イノベーションを生む企業文化・風土を作れ～」2019年

InstagramなどはICTの代表的アプリです。ICTの研究開発者は、社会のニーズをいち早く感じ取り、これらの先進的なアプリを世に問うてきたのです。逆に、このようなICTアプリにより、社会は急速に変わってきました。例えば、使用していない個人所有の自動車をスマートフォンから呼び出してタクシーとして利用するサービスなど、個人の所有物を共用する方向性や、電力自由化により電気料金を安くできるように電力会社を組み合わせるサービスなどのように、多様なサービスを複雑に組み合わせて個人に特化したサービスを利用する方向性などが出てきています。このように社会を大きく変革する力を持ったICTですが、この推進役として、ICTを使いこなして様々なサービスを社会に提案できる技術者の重要性がますます高まってきています。社会は急速にグローバル化し、これまでにはなかった新たな課題が次々と出てきています。それらを解決するソリューションを、ICTを使って積極的かつ主体的に提案できる技術者への社会的要請が強くなっているのです。社会の動向を見据え、関係する人たちと意見交換を行って、有用なソリューションを考え出し、評価して、提案できるというのが、今求められている技術者像なのです。ここで重要なことは、技術者が、様々な技術の特性や問題点、限界を十分に理解しているということです。特に最近ではCPSで収集した大量のデータ(ビッグデータ)をインターネット上で共有して活用するIoT(Internet of Things)が本格化してきており、技術相互の影響関係などを理解し整理できる確固たる技術的基盤が求められます。あくまでも技術力がベースとなり、社会的な問題意識が先導役となって、ソリューションにつながるのです。

■ 社会で活躍できる技術者

情報理工学部では、上記のような技術者を育成するために、以下のような取り組みをおこなっています。

(1) 確固たる専門性と独創性をかね備えた人材の育成

1回生でICTの修得に不可欠な基礎的知識をしっかりと学びます。1回生秋学期にコースに分かれ、個々の学生の興味に合わせた専門的な知識や技術の学習を、講義や演習を通じて段階的に行います。必要に応じて他コースの講義も受講できます。その成果は3回生の後半に配属される研究室における卒業研究として結実します。卒業研究では、専門性に加えて、独創的な技術の発想と実現に挑戦します。このように、初年次から卒業まで、段階的に着実に専門性を身に付けることができます。

(2) 国際社会を舞台に活躍できる人材の育成

ICTはもともと世界標準のグローバルな技術であるとともに、国境を越えて世界を結び付ける技術です。新たな発想は世界に発信して評価を受け、広がるのです。したがってICT技術者には、世界の人とコミュニケーションをとるグローバルな意識と、積極的に情報発信を行う行動力や積極性が求められます。このような人材を育成するために、学生の实力に応じた系統的な英語教育を行うとともに、学部独自の短期海外研修プログラムを充実させています。オーストラリア、米国、インドなどで、英語でICTを学ぶことにより、国際社会を舞台に活躍できる人材としての基礎力を身に付けることができます。また学部、研究科には多くの国際学生がいますので、日本人学生と国際学生が交流できる場を正課内外で設けています。

(3) 高いキャリア意識をもつ人材の育成

学生自身が、大学時代に身に付けておくべき専門能力を自覚し、主体的に探求して、その専門能力の修得方法を考える機会を与えるため、正課として講演会、PBL、連携講座などのキャリア教育を積極的に取り入れています。これらを企業と連携して実施しています。

以上のように、情報理工学部として、専門性と独創性を兼ね備え、国際社会で活躍できる、高いキャリア意識を持つ人材を体系的に育成しています。高度なICTを適切に活かせる人材としての活躍を期待しています。

■ 考えてみよう

- ・2045年頃には、コンピュータの能力が人間の能力を超えて技術的特異点(singularity)に至ると予想されています。そのときの人間とコンピュータの役割について考えてみよう。
- ・コンピュータが得意な分野と不得意な分野について考えてみよう。
- ・皆さんがコンピュータを使って実現したいことは何ですか。

生命科学部の学び—分子と物質・生命

すべての物質は分子からできています。また、それらの分子は化学反応により他の分子に変わります。これらのことは、生物か無生物かにかかわらず、まったく同じであり、同じ原理によっています。



生命科学部 教授 岡田 豊

はじめに

20世紀には物理学を基盤とする工学分野の技術が加速度的な発展を遂げ、我々の生活はとても豊かになりました。その一方で、科学技術の急速な発展は、地球環境問題をはじめとするさまざまな問題を引き起こしたことも事実です。

これを解決するためには、あらゆる分野の科学の学際的な協力が必要なことは言うまでもありません。そして、その中心にある学問が生命科学なのです。21世紀は「生命科学の世紀」といわれるように、生命科学を基盤にした科学技術が社会や生活に深く浸透すると予想されています。社会が自然と共生し持続的に発展を遂げていくためにも必要な環境、食糧、生物資源の分野においても、大きな貢献が期待されています。

それでは、「生命科学」「生命科学を基盤にした科学技術」とは、どのような分野でしょうか？

物質を分割していくと

今、みなさんは、この冊子を読んでいます。冊子はもちろん紙ですし、印刷にはインクが使われています。つまり、みなさんの前には、紙、インクという物質があります。これらの物質をどんどん細かくしていけば、何になるのでしょうか。すべての物質は、細かく分けていくと分子に分割できます。分子をさらに分割していくと原子になります。詳しく説明することは避けますが、紙にもインクにも炭素原子が含まれています。そして、紙の中の炭素原子も、インクの中の炭素原子も同じもので、区別はできません。言い換えれば、原子まで分けてしまうと、紙、インクといった物質のもつ本来の性質は示さなくなります。したがって、我々の身の回りの物質の性質を考える際の最小単位は分子ということになります。

では、紙、インクといった無生物から生物に目を移してみましょう。窓から外を見ると、少なくとも1本は木が見えるでしょう。それらの木の幹や葉を分割していけば何になるのでしょうか。答えは紙、インクと同じく分子、さらには原子になります。大木のように大きなものでも、アメーバーのように顕微鏡でしかみえない生物でも、分割していくと分子・原子になるということはまったく変わりありません。我々の身の回りにあるものはすべて、あるいは天体に目を向けて地球や太陽のような星も含め、あらゆるものは分子に分割することができます。生物か無生物かにかかわらず、まったく同じです。

化学反応

「物質本来の性質を示す最小単位が分子である」ことは何度も述べてきましたが、社会に対してまった

参考文献

- 日本化学会(編)『化学ってそう！夢が広がる分子の世界』化学同人 2003年
- 惣田豊夫・出口潔『物質と生命科学』現代図書 2011年
- 生命科学編集委員会(編)『生命科学1—生物個体から分子へ』コロナ社 2012年
- 生命科学編集委員会(編)『生命科学2—生物個体から生態系へ』コロナ社 2013年

く新しい有用なものを作り出すにはどうすれば良いでしょうか。分子を分割すると原子になりますが、逆に言えば分子は原子が化学結合により生じたものです。ある分子を別の分子に変えるためには、今ある結合を切断して新たな結合を形成する、すなわち結合の組み換えを行えば良いのです。これが化学反応です。我々の身の回りにあるいろいろなものは、この化学反応によって作り出されたものです。

プラスチック・化学繊維等いろいろなものが化学工場で作られています。化学工場できたプラスチックは目的のかたちに成型して、化学繊維は布にして服・下着あるいはカーテン等として社会に出ることになります。プラスチック・布に色をつけるためには、塗料あるいは染料が必要です。これも化学工場で作られています。ここで、化学繊維でできた布を染料で染めるということを考えましょう。繊維および塗料のどのような性質に注目すれば良いかということです。まず、色をつけることが目的ですから、染料は着色している必要があります。着色物質とは可視光を吸収する性質をもっています。化学反応により染料分子の一部を変えることにより吸収する光の範囲を変える、すなわち色を変えることができます。さらに、布を染色する際には、洗っても色落ちしないように布(繊維)と染料を強く結びつける必要があります。そのためにも、染料分子の一部を変えるという工夫をすることが行われます。当然のことながら、対象とする繊維が何かによって、工夫の仕方は異なります。このようにして、目的の色をもち、目的の繊維と強く結びつく性質をもつ分子が作りだされています。

ここでも生物に目を向けてみましょう。無生物と生物の違い、すなわち生物の条件はいくつかありますが、その1つとして複製、すなわち生物は自己増殖能力をもつことがあげられます。DNAの上に書かれた情報をもとにして、全く同じDNAが複製される、これが自己増殖のおおもとです。では、DNAの上に書かれた情報とは何でしょうか。DNAはヌクレオチドという分子が互いに結合した鎖状の高分子化合物です。そして、DNAを作っているヌクレオチドは4種類しかありません。ここでは、話を簡単にするために、4種類のヌクレオチドをA、T、GおよびCと呼ぶことにします。さらにDNAは二重らせん構造を形成していますが、今は無視します。その4種類のヌクレオチド(A、T、G、C)の並び方が、情報を記述する暗号になるのです。DNAが複製されるときには、DNA中にあるAの部分には、外からTが、Gの部分にはCが近づいてきます。逆に、Tの部分には、Aが、Cの部分にはGが近づくという具合です。そして、それら(A、T、G、C)が互いに結合することにより新しい鎖状の高分子ができ上がります。これを情報の複写と呼んでいます。このときできた鎖状高分子は、元の鎖とはAとT、GとCが入れ替わったもので、元の鎖とは違う分子です。しかし、もう1度複写を行えば、元の鎖と同一の分子になります。

では、なぜ、AがTに引きつけられ、Gの近くにCがくるのでしょうか。この原因は、先に述べた繊維と染料を結びつける力と同じです。すなわち、特定の繊維がある染料と強く結びつくのと同様に、ヌクレオチドAとT、GとCは強く結びつく性質をもっているため、この組み合わせで複写が起こるのです。

■ 生命科学・生命科学を基盤にした科学技術

生物を含むすべての物質は分子からできています。そして、それらの分子は、体内でも起こっている化学反応により、他の(人間・社会に役立つ)分子に変換できます。本冊子では触れませんが、ターゲットとする分子を決めるには、生命の働きやその作用機構、あるいはより高機能をもつプラスチックの設計等も必要です。これらを総合した学問が生命科学です。さらに、生命科学の研究成果を社会に還元し、健康で豊かな生活の実現に寄与することのために、生命科学を基盤にした科学技術の確立が強く求められています。

■ 考えてみよう

- 布を染料で染めるとき、繊維と染料を強く結びつける必要があります。強く結びつけるために、どのような力が働くかを考えてみましょう。また、ヌクレオチドAとT、GとCの間に働く力は何か考えてみましょう。
- 生物の特徴として自己増殖能力をあげましたが、他に生物を特徴づけるものは何か調べてみましょう。

医療における薬学の位置づけと薬学部での意義や学びの特色

薬学部は「薬」に着目して、人の健康や公衆衛生に関わる学部であり、6年制課程は薬のプロである薬剤師を、4年制課程は創薬研究者を養成する。本稿では医療における薬学の位置づけ、薬学部の意義や特徴を紹介する。

薬学部 教授 浅野 真司



薬学は「薬」に着目して、生命現象と人の健康を総合的に科学する学問分野であり、医薬品を発見することや創ること(創薬という)と、医療現場で医薬品を正しく使うこと(適正使用という)を通じて人類の健康と幸福に貢献し、社会の発展に寄与することを使命としています。本稿では、「薬とは何か」から始めて、医療における薬学の位置づけ、薬学部6年制・4年制課程の意義や特色について紹介します。

■ 薬とは何か

「薬」とは何でしょうか。広辞苑には、「病気や傷を治療するために服用または塗布・注射するもの。心身に滋養・利益を与えるもの」とあります。昔々、私たちの先祖は、命の危険に晒され、病気との闘いの中で経験的に、草の根や木の皮や動物、鉱石などに含まれる成分に薬となるものを見出し、伝承して来ました。中国最古の薬物学(本草学)の書である「神農本草経」に名を残す神農は百草(沢山の草)をなめて、その薬効や毒性の有無を検証し伝えたという伝説があります。これと同じように、国ごとに今に伝わる伝承薬、民間薬が存在します。時代は下り19世紀の終わり頃になると合成化学が進歩し、さまざまな化学物質が自在に合成されるようになりました。1897年にドイツのホフマンが、消炎鎮痛薬としてアスピリンを合成したことは有名です。また、人や動物に含まれる微量な成分を抽出し、その働きを明らかにすることで新たな薬が誕生しました。血圧を上昇させるホルモンであるアドレナリンや、糖尿病治療に欠かせないインスリンなどが代表例です。生体物質から医薬品を創ることは、20世紀末からの遺伝子組換え技術の導入によって急速に発展しました。さらに現在では、「ゲノム創薬」と呼ばれる遺伝子情報に基づいた医薬品を創ることも行われています。現在、薬による治療(薬物治療)は医療の中で非常に重要な位置を占めており、日本では医療用の医薬品として2万品目近い数が存在します。

■ 薬の適正使用と医薬分業

薬と毒は別物、対極にある2種類のものと思われがちですが、実は薬と毒とは表裏一体、不可分の関係にあります。ある化合物が薬として働くか、毒として働くかは、使う量(用量)や使い方(用法)によって決まるといえます。一般に、医薬品は少ない量(低用量)では薬として働くが、量が多くなると程度の違いこそあれ毒性を示します。薬に期待する本来の目的以外の好ましくない作用(毒性)のことを「副作用」と云います。風邪薬を飲むと眠くなるなど軽い副作用ならばまだ許されるとしても、副作用が重篤な場合には患者の生死に関わることもあるのです。薬の毒性がもたらした社会問題として薬害があります。医薬品の重篤な副作用による健康被害が大規模に拡大したものです。「サリドマイド」や「スモン」をはじめ、多くの薬害は、私たちに薬の持つ危険性と、医薬品や最新の医薬品情報を収集・管理し、活用することの重要性を示しています。薬剤師に求められることは、最新の医薬品情報に通じると共に、医薬品の適正な使用を促すことで薬のメリットを最大限に生かす一方、副作用の発生を極力避けることといえます。

最近、病院で診察を受けると、診察後に、薬の種類・量などが書かれた処方せんを受け取ることが多

参考文献

『これから薬学をはじめるあなたに』 日本薬学会 2013年
鎌滝哲也 『薬学へのいざない』 東京化学同人 2012年

くなりました。これを薬局に持って行くと薬が処方されます。このように、「医師は患者を診て診断し薬を処方する」、「薬剤師は処方チェックして薬を出す」という具合に「医」と「薬」の働きを分担することを「医薬分業」と云います。薬剤師は患者さんの薬を一元化して管理すると共に、薬物治療の安全性と効果を確認するため、処方に問題がある場合には、医師に対しての確認(疑義照会)を行う義務があるのです。

■ 薬学部6年制・4年制課程の意義と特徴

これまでの日本の薬学教育は「薬を生み出す創薬研究者」と「医療現場で医薬品を扱う薬剤師」の養成という2つの面を持ちながら、4年制課程として発展してきました。しかしながら、薬物治療を含む医療技術が著しく進歩する中で、医療現場で活躍できる専門性の高い薬剤師の養成が必要となり、法律が改正されて2006年に主に医療現場で活躍する薬剤師を養成する6年制と、薬を生み出す創薬研究者を養成する4年制という2つのコースがスタートしました。薬剤師になるための国家試験を受験するには、医師の場合と同様に、6年制のコースを卒業することが必要となりました。そうした中、本学では2008年、びわこ・くさつキャンパスに6年制の薬学部薬学科を、また新たに2015年に4年制の創薬科学科を設置しました。薬学部は人の健康や公衆衛生、創薬に関わる、学内では唯一の「医療系」の学部です。また、6年制課程の卒業生の進路は病院、保険薬局やドラッグストア、製薬企業、医薬行政などですが、進路に関わらず皆が薬剤師国家試験を受験します。4年制課程の卒業生の進路は大学院進学、医薬品創製の分野における基礎研究および臨床開発に携わる製薬企業、研究所などになるでしょう。

6年制の薬剤師教育において身につけることが求められている力とは、まず患者さんと向き合うこと、病気のことを十分に知ること、その上で患者さん一人ひとりに対して適切な薬を選択し、薬の使用法を提案する力です。こうした力を大学教育の中で身につけるために、「薬学教育モデル・コアカリキュラム」(以下、「コアカリ」という)が導入されています。「コアカリ」は、薬学の知識や技能と共に、医療人として相応しい態度を養成する為にまとめられた標準的な教育モデルで、本学でもこのコアカリに沿って科目が配置されています。また、5年生時には病院、薬局各々で11週間にわたる参加型の実務実習が必修化され、薬剤師の指導下で、薬剤師業務、患者対応などを実際に行い、臨床の場における実践力を養います。また、4年制では、大学院修士課程2年を加えた6年を実質的な教育課程として、創薬の高度な専門知識と研究力を有し、医薬品などの基礎研究および臨床開発において活躍できる人材を養成します。

■ 医療を取り巻く環境の変化と将来の薬剤師、創薬研究者

我が国では、医療が高度化する一方で、超高齢化が進み、医療制度の危機が叫ばれています。膨張する国民医療費を抑える為の一助として、薬剤師が薬を管理して無駄な薬を使わないことが求められています。また、医師、看護師、薬剤師などの医療従事者がそれぞれの専門分野を生かして分担・連携し、患者さん中心の医療の実現を目指す「チーム医療」も実施されています。さらに、医師が専ら行ってきた医療行為の一部を、専門薬剤師等に肩代わりする動きも見られます。今後、薬剤師が行いうる医療行為が拡大することが期待されますが、その時に医療の質が担保できる程に薬剤師の能力が高くある必要があります。皆さんが社会で活躍する10年、20年後の未来の姿をしっかりと見据えて、社会の期待に応えることが出来る存在になれるように、学部6年、4年間の学びの中でしっかりと基盤固めをしてください。その為にも、本学が総合大学であることの利点を最大限に活かし、学内外での多様な人との出会いや学びを通じて、「+R」を体得してもらいたいのです。立命館の薬学部を卒業した皆さんが、豊かな人間性、創意工夫をもって困難な問題に取り組む力や、生涯学び続ける姿勢を身につけた薬剤師、創薬研究者として活躍することを期待しています。

■ 考えてみよう

- 薬害の再発を防ぐには、薬剤師として、薬学生としてどのようなことをすれば良いのでしょうか？
- 医薬品を安全に管理、使用する上で「医薬分業」には具体的にどのようなメリットがあるのでしょうか？
- 医薬品を創製するには、どのような視点からの取り組みが必要でしょうか？

新しい現実を創発する経営学の学び

経営学の対象は、単なる人やモノの集合にはとどまらない現象の創発と、同時にそうした現象を乗り越えていこうとする人々の営みにあります。学際的なアプローチで、複雑な現実に取り添うことが大きな特徴と魅力です。

経営学部 准教授 **吉田 満梨**



■ 経営学の学際性と経営現象の複雑さ

経営学が対象とするのは、市場経済の中で社会にとって価値あるものを提供しようとする企業や組織の活動です。現実の企業活動の分析を通じて、何らかの法則やメカニズムを特定し、役に立つ一般化可能な知識を生み出すことを目的としています。経営学が対象として扱うトピックには、みなさんがよく知っている企業や商品、具体的な事象が登場するため、身近に感じられる人も多いのではないのでしょうか。たとえば、「組織論」という言葉は使わなくても、高校時代までに部活やクラス等、何らかの組織でリーダーとして悩んだ経験を持つ人もいるでしょうし、「マーケティング」が何かを知らなくても、消費者としての私たちの日常は、すでに企業の価値創造活動の中に埋め込まれています。ただし、学問としての経営学の本当の面白さは、それだけではありません。

同じ社会科学の他の学問分野と比べた時、経営学の大きな特徴の1つは、経済学、社会学や心理学といった、多様な学問分野の概念や方法を用いる、学際的な学問領域である点でしょう。それは、経営学が対象とする企業活動や、企業が直面する問題が、複数の方法やアプローチを組み合わせなければ説明することのできない、複雑な現象であることを意味しています。

なぜ、経営現象は複雑なのでしょう。その理由の1つは、経営学が扱う現象やメカニズムが、人と人、そして人と技術や制度といった人工物とが、相互に影響を与え合う結果として生じる、創発的な性格を持つためだと言えるでしょう。創発とは、単純な要素の総和にとどまらない性質が、全体として現れることを意味します。それゆえ経営学では、社会的に成り立っている仕組みや秩序といったシステムと、システムの下で行為をする人々や技術や制度だけではなく、人々が既存のシステムや秩序を乗り越えていく、創造的な側面をも捉えようとしています。人々の行為が相互に影響を及ぼす結果、例えば10年前には想像もつかなかった、革新的な製品が生まれ、逆に、頑健だと思われていた企業や技術の優位性が失われてしまう、そうしたドラマチックなプロセスが、経営現象にはあるのです。

■ ある時点で成功した仕組みが失敗を導く

有名な例として挙げられるのは、20世紀初頭のアメリカの自動車メーカー、フォード社とゼネラル・モーターズ(GM)社との競争です。この時代は、アメリカに巨大市場と大量生産体制が成立し、経営学が大きく進展した時期でもありました。1903年に創立されたフォード社は、1908年に発売した「T型ツーリング・カー」を1車種大量生産できる仕組みを確立し、自動車価格の大幅な引き下げに成功します。当初850ドルで年間約6千台売られていたT型が、1916年には360ドルで買えるようになると、それまで富裕層しか乗ることのできなかった自動車が、一般の人々へも普及し、販売台数は約58万台へと大きく伸長しました。また、フォード社が大量の労働者を工場に雇用したことで、購買力を持った消費者自体も拡大し、1921年

参考文献

- 石井淳蔵・廣田章光(編著) 『1からのマーケティング 第3版』碩学舎 2009年
 近藤文男 『成り立ちマーケティングの研究』中央経済社 1988年
 リチャード・テドロウ(近藤文男監訳) 『マス・マーケティング史』ミネルヴァ書房 1993年

にはT型は55.7%という市場シェアを実現する成功を収めます。つまりフォード社は、安くて良いものを提供できる仕組みづくりによって、車を持ちたいという人々の夢を叶え、成功を収めたといえます。

ただし、フォード社の繁栄は長くは続きませんでした。1908年に創設されたGM社は、T型フォードが隆盛を極めた時代には、販売台数でフォード社に大きく水をあけられていました。しかし1921年の改革を機に、やがてフォード社を急速に追い抜いていきます。改革の主な内容は、事業部製組織を導入し、混乱していた製品ラインを価格帯ごとに6車種に整理し、大衆車から高級車までフルラインアップ体制を確立(ただし、各車種の大量生産は堅持)することでした。さらに同じ車種でも、多様な色やスタイルを展開し、年ごとにモデルチェンジも行いました。フォードが1車種大量生産による低価格で支持を得ていたのに対して、GM社の自動車は、最も安い車種「シボレー」で450-600ドル、最も高い車種「キャデラック」は、T型フォードの10倍もの値段で販売されました。しかし、これが大きな成功を収めます。その理由は、フォードの成功によって、人々の夢が車を持つこと自体では、もはやなくなっていたからです。むしろ皆が自動車を持つようになったことで、他の人とは違う自分にふさわしい自動車を持ちたいという、消費者の新しいニーズが生まれたと言えます。

こうした事例を見ると、有効な仕組みや価値がある製品のタイプというものが、その時代の人々が何を求めているかと共に変化をすることが分ります。さらに、ある時点での1つの方法の成功(1車種大量生産による低価格の実現)は、それが他の人々(消費者のニーズや競争相手の行為)に影響を与える結果、次の時点では、元々の成功を支えていた市場環境自体を変化させてしまう可能性があることも、理解できるでしょう。

■ 経営学を学ぶことの意義

ここまで見てきたように、経営学が対象とする企業の活動には、どんな環境、どんな組織でもうまく行くような唯一最善の正しいやり方が存在するわけではありません。それでも経営学の理論を学ぶこと、研究することには、大きく2つの点から意義があります。

第1に、どのような環境でも普遍的に有効だといえるやり方は存在しない一方で、特定の環境条件のもとで、有効に機能する仕組みを明らかにすることはできるためです。経営学では、多様な学問分野の知識を活用しながら、役に立つ新しい概念や理論を開発して、複雑な現象に迫っていくことができます。

第2に、経営現象では、ある人の行為や新しい仕組みの成立が、他の人の行為を変える現実があることを、フォードとGMの事例でみてきましたが、同様の関係が、経営学が生み出す「知識」と、経営の「実践」の間にもあるためです。つまり、実際に企業で働く人々やいずれ就職するみなさんが、経営学の概念やフレームワークという、新しい「人工物」を手にすることで、それまで困難だった新たな行為が可能になるということです。それこそが重要なことだと思います。経営学においては、ある理論が有効なのは、それが「真理」だからというよりも、現実の経営問題の解決において「役立つ」道具であるためだと言えるでしょう。特に近年では、企業で働きながらMBA(経営学修士号)を取得する方も多く、経営学の学問と実践は、ますますお互いに影響し合う関係にあります。

企業活動を通じて価値を創造するためには、組織内の人材、顧客、投資家など、多様で異なる関心を持つ人々から構成される現実に寄り添いながら、問題解決をする能力が求められます。そのために役立つ道具を、ぜひ経営学部で身につけてください。

■ 考えてみよう

- あなたにとって身近な製品(例：スマートフォン、カップラーメン、洗剤 etc.)を想定し、そうした製品が満たしている消費者ニーズは何か、出来るだけ多く挙げてみましょう。
- また同じ製品市場を構成している、別の企業のブランドが対応しているニーズは、同じものかどうか、考えてみましょう。
- その製品に対する消費者ニーズが、時代と共にどのように変化してきたのか、調べてみましょう。

政策科学における PBL 〈新成人からお世話になった方へ、感謝を込めて生菓子を贈る新習慣を広めよ〉

政策科学部で実施された問題解決型の学びの一例として、和菓子の普及に取り組んだ学生たちの顛末を紹介します。学生たちは何度も壁にぶつかりましたが、それがすばらしい経験となりました。PBL での涙はダイヤモンドに変わります。



政策科学部 教授 服部 利幸

政策科学部は設立当初より問題解決型教育 PBL を志向し、実践性を加味したカリキュラムを運用してきました。特に重視する取組みは小集団クラスによる PBL です。Project-Based Learning とか Problem-Based Learning の略です。ここでは PBL の理解を深めるために一例を紹介します。PBL の詳細は学部ウェブサイトで説明されていますので参考にしてください。事例は京都和菓子業界の若手経営者の依頼にもとづく和菓子の普及拡大という課題への取組みです。チームは政策科学部2回生の7名で、和菓子班と名乗りました。

■ モノをつくる・・・うちは菓子学校ではないけど

まず京菓子屋の社長さんや職人さんへの聞き取りや学生向けのアンケートを経て、若者が欲しがる今風の和菓子を提案するという案が浮上しました。学生たちが考えたデザインと味とネーミングで今までに無い和菓子(モノ)を世に出すという案でした。さてみなさんはどう思いますか？ 確かに自分たちの考案した和菓子が店舗に陳列され、珍しい試みとしてマスコミで取り上げられれば気持ちの良いものですね。しかし、よく考えてください。学生が考案した和菓子を関係者以外だけが食べてみたいと思いますか？ 日々お客さんに接している職人さんは必死で菓子作りに取り組んでいます。学生の思いつきでは歯が立ちません。マスコミはこのお菓子の普及に協力してくれるのではなく、学生が珍しいことをしているから取り上げるのです。新しい和菓子を開発して欲しいという課題であるならばその返答になりますが、学生のアイデアによる新しいお菓子の開発は和菓子の普及に繋がるものではないですね。政策科学部の学生よりも調理の技術を持っている菓子学校や調理学校の学生の方が良いものを考案すると思いますし、学生とお店のコラボレーションという話題性を追求するだけならば、中学生や高校生でも和菓子は提案できます。

■ しくみをつくる・・・これでもいいけど、こじんまりしていて面白くないわ

ダメ出しを受けた和菓子班は京都の和菓子に2種類の販売方法、すなわち、店頭陳列販売と受注生産販売がある点に注目しました。そもそも菓子は祝い事、儀式、法事、茶会などに応じてお客さんからの要望を聞き、ときには試作品を作り、完成させる受注生産販売が主流でした。この方式は今も茶道の茶会などで利用されています。和菓子班はこれを一般のお客さんにも手軽に利用してもらおうと考えました。お客さんが自分の好みの京菓子を簡単に注文できるしくみを提案することで和菓子、特に高価な生菓子の普及拡大を狙いました。モノづくりからしくみづくりへ変更です。さらに調べるとお店とお客さん双方に課題があることが明らかになりました。初めて注文するお客さんは何から依頼したらいいか、段取りが分からず億劫になるとのことでした。お店側も永くお付き合いのあるお客さんとのやり取りに慣れており、初めてのお客さんの要望をどのように引き出したらいいのか迷っていました。

参考文献

立命館大学政策科学部 『P.S.BOOK 入門編—基礎演習副読本』 2013年 (政策科学部ウェブサイトの学修ツールより PDF 版又は iBooks 版をダウンロード可)
福澤一吉 『議論のレッスン』 日本放送出版協会 2002年

和菓子斑は双方のコミュニケーションを支援し、促進するしくみがあればいいのではないかと考えました。お客さんも職人さんも、もっと赤くとか、季節感をもっと出してとか、半透明にするとか、日本語でも意思伝達に苦労します。そこで慣れないお客さんと職人さんが同じ視点で話ができるように、現代版見本帳、受注仕様書、受注データベースを提案しました。提案の最大の課題はどのような項目を見本帳や受注仕様書に準備し、形容詞の表現をいかに分かりやすく記述するのかという点でした。テレビドラマに出てくるようなプロ中のプロの職人さんたちから必要な項目を聞き出し、それを素人のお客さんに分かりやすいものに変換する作業は大変でした。

なかなかの出来栄で和菓子屋さんにも興味を持ち複数店舗利用も視野に入れていましたが、政策科学という視点から面白くない、こぢんまりし過ぎと私は指摘しました。和菓子斑はここで妥協してもよかったのですが、前向きで積極的な学生ばかりでしたので、次の段階を目指しました。後期開講前でしたが、夏休みに何度も合宿を繰り返した過程で、実は並行して代替案も準備していました。

■ 仕掛けをつくる・・・大胆だけど、卒業後だれが継続するの？

メンバーはバレンタインデーや母の日という記念日と贈り物の関係に注目し、成人の日と生菓子里にたどり着きました。生菓子里に代表される和菓子になじみが薄い若者層を対象にし、新成人がこれまでお世話になった方々、特にご両親へ感謝を込めて生菓子里を贈るという仕掛けです。感謝を述べる際になにか贈り物があれば、感謝の言葉が出やすいという点に着目しました。

この案に対してベテラン職人さんが強く反対されました。もともと成人式とは新成人がここまでよく育ったと祝ってもらう儀式であり、新成人へお菓子里を贈る風習もある。さらにお祝い返しに紅白饅頭や赤飯を贈る習慣もあるとのことでした。プロが尊重する正当な伝統です。この職人さんが納得しないと進みません。しかし、業界を代表するこの職人さんが作るとなると他の京菓子屋に対する働きかけになります。ここでメンバーによるベテラン職人さんへの説明が何度となく行われました。最終的には、今の若者は本当にそんな感謝の想いをもっているのかという点に絞られました。口先だけではないかと。メンバー各自が自分の言葉で親への想いを伝えたところ、このベテラン職人さんも60年以上前のお母さんへの思い出を話され、最後に一言、「引き受けさせていただきます」と頭を下げて、お返事をいただきました。ここまで来るとPBLはPeople-Based Learningといえるでしょう。

さて、この仕掛けでは、マスコミ、学内外の学生団体への協力依頼、ウェブサイトの広報などが展開されました。当時まだLINEは普及していませんでした。2年目の成人の日には参加する和菓子店を増やし、一定の受注も獲得しましたが、ご存知の通り、ムーブメントは起っていません。残念ながら継続発展させることができませんでした。和菓子斑のメンバーが卒業したら誰が引き継ぐのか、引き継ぎに値するものなのか、という点が解決できませんでした。事業の引き継ぎは実社会でも難しい課題です。

学生たちの活動は失敗でしたでしょうか？ 問題解決として継続的な成果に繋がりませんでした。Learning・学びとしては成功です。政策科学部で取り組まれるプロジェクトを見ていますと、多くの学生が大小いろいろな失敗を経験することで学びは成功しています。もちろん成功より学ぶこともたくさんあります。成功はもとより失敗からも十分に学ぶことができますので、失敗を恐れず、PBLに取り組んでください。

■ 考えてみよう

- ・自らの経験を他の場面に活かしたことが今までにありますか。
- ・自分の経験ではなく、他人の経験を活かすことは可能でしょうか。
- ・他人の経験を得る方法として考えられるものをリストに書き出してみてください。
- ・あなたならば、和菓子里の普及拡大にどのような方法で取り組みますか。
- ・成人の日には和菓子里を贈る習慣、どうすれば実現するでしょうか。

総合心理学部の学び

総合心理学部は、大阪いばらきキャンパスに、2016年4月に開設されました。総合的かつ現実的な多角的視点からの人間理解に基づいて、現代の幅広い課題に取り組み、またグローバルに活躍することのできる主体の育成を展望する総合心理学部。従来の心理学教育とは一線を画した新しい学びをご紹介します。



総合心理学部 准教授 安田 裕子

総合心理学部における「総合」とは

総合心理学部での学びは、人間を総合的に探求し理解することが目指されています。それでは、総合心理学部の「総合」とは一体どういうことを指すのでしょうか。

それは2つの柱で成り立っています。1つは、心理学を「総合的」に学ぶ、ということです。心理学の基礎から応用、臨床に至る縦方向の広がり、知覚、記憶、発達、教育、社会などはもとより、情報科学、脳科学などの境界領域を含む横方向の広がりのなかで、できるだけ幅広くまたバランスよく心理学を学修できるように、カリキュラムを編成しています。とりわけ2年次からは、「認知・行動コース」、「発達・支援コース」、「社会・共生コース」の3つのコースにわかれ、心理学の専門科目を系統的に学んでいきます。もう1つは、「総合的」な人間力を身につける、ということがあげられます。隣接分野である哲学をはじめ、社会学、経済学、政治学など、人文・社会科学分野を幅広く学ぶ「総合人間理解科目」を、学部共通科目としています。こうした2つの柱に支えられた総合心理学部では、社会で、家庭で、企業で、人生で、生きる／生かせる心理学を存分に学んでいきます。

総合心理学部の専門科目は大きく「学部共通専門科目」と「コース専門科目」の2つにわけられます。まず、学部横断的な専門の学びとなる「学部共通専門科目」について、そして次に、心理学の専門性をコース別に学び深める「コース専門科目」に関して、ご説明しましょう。



総合心理学部における総合性

学部共通専門科目

「学部共通専門科目」は、心理学分野の共通基礎となる科目や、心理学の各分野を横断して学修すべき科目、心理学分野全体に通じる研究方法や技能を獲得するための科目によって構成されます。総合心理学部の総合性を支える1つの柱である「総合人間理解科目」はこちらに位置づけられます。「総合人間理解科目」では、多角的な視点から人間を総合的に理解する力を育み、心理学の学びを深めつつ、幅広い教養に結びつけていきます。1年次では「人間観の探求」という科目を通じ、哲学や

思想分野と政治学分野に関わる分野を学び、総合的理解の基礎を養います。2年次では「家族と人間」「組織と人間」「政治と人間」「経済と人間」を、そして3年次では「現代家族論」「組織行動論(産業・組織心理学)」「行動経済論」「総合人間理解特殊講義」の科目を通して、家族や組織、経済現象を心理学的な視点から理解しながら、人文科学や社会科学の幅広い教養・知識を修得します。

「総合人間理解科目」の他に、「共通専門科目」「専門外国語科目」「演習科目」「実験・実習科目」があ

参考文献

サトウタツヤ・北岡明佳・土田宣明 『心理学スタンダードー学問する楽しさを知る』 ミネルヴァ書房 2014年

ります。ここでは、「実験・実習科目」として4年次前期に置いている「臨床・実践フィールドワーク(心理実習)」をご紹介します。この科目は、対人援助関連機関を訪問して見学し、観察やインタビューなどを行う臨床・実践の実習科目です。病院、心理臨床開業施設、社会福祉関連施設、幼稚園、保育園、教育関連機関、弁護士会、企業、各種 NPO などを対象としたフィールドワークにより、実感と深い納得をともなった実践力を養成する教育を実現します。なお、「演習科目」や「実験・実習科目」では、小集団学習を通じて、問題解決能力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などの応用力を幅広く育成することも目指しています。

■ コース専門科目

「コース専門科目」は、上に述べた、総合心理学部の総合性を構成する柱のもう1つとして特徴づけられます。2年次よりコースにわかれ、専門科目を学んでいきます。もっとも、所属するコースを越えて、他コースの専門科目を履修することもできます。「認知・行動コース」では、人の心のはたらきと行動の仕組みを実験的な方法を用いて科学的に探求し、人間そのものの理解を深めます。また、「発達・支援コース」では、乳児期から高齢期に至る人間の発達について生物学的次元から社会・文化的次元までさまざまな知識を獲得し、発達のメカニズムを学修します。そして、「社会・共生コース」では、自己と他者の関係といった身近な対人関係から地域やグローバル社会で発生する紛争問題まで、多様な人間関係における問題とその解決について、心のはたらきと行動の仕組みをひも解きながら学修します。

■ プロジェクト発信型英語プログラム

学生が自ら課題を発見し、調査・研究を通じてその課題を解決し、発表・議論や論文作成につなげていくプロジェクト型のアクティブな学びは、「演習科目」や「実験・実習科目」にとどまりません。必修の「外国語科目」では、「プロジェクト発信型英語プログラム」を採用しています。そこでは、学生自身が興味・関心をもったテーマについて、世界中から情報を集め、調査を行い、その成果を英語で発信し、英語でのディベートを体験するという学習スタイルによって、学びを推進していきます。国際社会で活躍するための英語運用能力を鍛えることに加え、論理的思考やコミュニケーション能力を養い育てることを目指して、教学を展開します。

■ 4年間を通じた段階的・系統的なキャリア形成

総合心理学部では、4年間を通して段階的・系統的に人間理解と人間教育を推し進めていきます。1年次には、心理学およびその隣接分野と社会との関わりを幅広くとらえながら、人間理解や自己理解、対人関係の基本、多様な心理学の基礎知識を学びます。2年次では、心理学の基礎理論や幅広い人間理解を基盤に、専門的・応用的な知識と技術や方法論を学修します。3年次には、心理学の専門科目や隣接する領域の応用的な学びを深め、社会で生かすことのできる実践力や応用力を身につけます。4年次には、学びの集大成として卒業研究に取り組みながら、形成してきた力量を、社会と将来に接続していきます。このように総合心理学部では、長い人生を見据えたキャリア形成をするべく、深い人間の探求を実現していきます。

■ 考えてみよう

- ① 心理学にはどのような分野があるでしょうか。「〇〇心理学」という表現で、自由にあげてみましょう。
- ② ①であげた「〇〇心理学」に即して、家庭や学校や社会のなかで、また人生において、どのような心理的な事柄がとらえられるかを話し合ってみましょう。
例)「発達心理学」／幼児の認知能力、小学生の学習、青年期の自己探求、夫婦関係の葛藤と深まり など
- ③ ②であげた事柄について、他にどのような隣接学問分野から探究できるかを話し合ってみましょう。
例)「青年期の自己探求」／発達心理学の他、青年心理学、家族心理学、文化心理学、社会学、哲学 など

グローバル化する社会で求められる教養の力と対話・コミュニケーション力

グローバル化が急速な勢いで進展する国際社会では、世の中の出来事を俯瞰して理解し、また地球・人類の歴史的文脈において未来を展望する学びを身に着けるグローバルな教養の力が求められ、それにはコミュニケーション力が重要な位置を占めるのです。



グローバル教養学部 教授 金山 勉

■ グローバル化する世界で求められる教養の力とコミュニケーション力

グローバル化が急速な勢いで進展する国際社会に身を置く現代の人々は、日々刻々、変化・対応を求められています。世の中の出来事を文学、哲学、歴史、法律、政治経済、社会学、情報学などにかかわるさまざまな視点を用いて、理論的かつ実践的に、広いスコープをもって捉えることは、激変するグローバルな社会環境の中で自分らしさを見出すために必要になってきているのです。現代社会が直面するさまざまな課題を自ら見つけ出し、その解決に向けた問いを自ら導き出すためには、物事の本質を見抜く力が必要です。そのためには過去の歴史と対話し、また現代の世界を構成する多様な社会・文化環境に身を置く人々との幅広い対話が必要なのです。それに加え、現代社会において刻々変化をとげるテクノロジーとイノベーションにかかわる適切な理解を欠かすことはできません。このような高度に複雑化する社会に身を置く私たちは、グローバル市民の一員として、理性、良識、倫理観をもって多様な価値観を受け入れながら、世界のあらゆる人々と民主的な対話を続け、協働して実践する姿を示してゆくことにより、はじめて持続可能な世界を自らのものにすることができるのです。自分のために何ができるかではなく、他者のために、他者とともに、よりよい未来を構想し、協働し、実現してゆくことが、私たちひとり一人に求められています。このような力を総合的にもって初めて、私たちはよりよい社会を築くためのパスポートを手に入れることができます。その意味において、私たちは、未来に向けた教養の力が、意味と意義をもって重要だと考えられる歴史的な転換点に直面しているとも言えるでしょう。

■ 他者とともに地球の未来を考えてゆくために求められるコミュニケーションの作法

世界の人々は、決して切り離された一個人として存在することはできず、私たちが購入する消費物資やサービスを考えてみても、その生産・製造にかかわっては国外から原材料を輸入したり、海外で組み立てを行った上で輸入したりするなど多様な状況がみられます。グローバル化がもたらすさまざまな状況変化のもとで、人々がどのような考え方や認識を持つかは、既存のマス・メディアに加えて1990年代半ばから急速な普及発展をみせているインターネットという現代に欠くことのできないメディア・通信網を基盤とする、現代的なコミュニケーションの回路およびその情報を表示するメディア、またはデバイスを通じた情報伝達によるところが大きいのです。世界の人々は、相互に依存して生活しており、個人が、またある国や地域の状況さえよければ、他者・他の国や地域のことは気にしなくてもよいわけではありません。その意味において、私たちは世界で日々どのような出来事が起きているのか、世界が直面している課題にはどのようなものがあり、どのような課題について優先的に取り組むべきかについて、主体的に考えることがもとめられています。だからこそ日本国内のみならず世界の出来事を伝えるメディアからの情報に、自らの課題・疑問意識をもって主体的にアクセスすることが重要です。

国内外を問わず、世の中の出来事に常に敏感であることは、自分との関係で、隣人との関係で、世界の

参考文献

ウォルター・リップマン『世論（上・下）』岩波文庫、1987年

金山勉、「フェイク・ニュース」考察から現代における中央メディア・放送の在り方を問う、『調査情報』、545・11-12号、2018年、pp. 8-13.

さまざまな場所で生活する友人、いつか会うであろう仲間との関係を常に意識するための基本的な作法として、日々の出来事を知っておくことが大切です。私たちが、「世の中の出来事を知る」という行為は、現代の民主的な社会に身を置く私たちの責任であると考えた方がよいと思います。なぜならば、社会的に重要な決定が行われた時、市民社会の一員である私たちが「知らなかった」という状況は見過ごされてはならないからで、「知らなかった」自分を「知っている」自分にし、さらに「知った上で、評価・判断する」自分に引き上げることによってはじめて、グローバル化が加速する現代社会を牽引する一人となることができ、そのようになることが期待されているからです。

私たちは世の中で発生している社会的課題に対して、さまざまな視点から、教養の力をもって考えをめぐらせることは大前提ですが、その上で今日のメディア状況を理解し、メディア・チャンネルを通じて情報(ニュース)として受け取る際、固定的なステレオタイプの視点でなく、創造的、批判的に受け止めることが重要です。

■ メディアを介して伝わる情報の信頼性を見分けることが求められる時代

新聞、テレビ、ラジオ、雑誌は、マス・メディアというジャンルに位置付けられていますが、インターネット空間でさまざまなメディア機能が統合・包含される現代においては、先にあげた既存のマス・メディアは、オールド・メディアと呼ばれることもあります。すでにそのピークを過ぎ、衰退するばかりという意味を含んでいます。他方、インターネット空間において、テキスト、音声、動画などを通じて送られてくる情報について、マス・メディアと同等の質を百パーセント期待することはできません。インターネット空間の情報(ニュース)は玉石混濁で、その信頼度においても大きな幅があるからです。

オールド・メディアの中でも、1980年代から1990年代にかけて、激動の世界を最前線で伝え続け、各国のリーダーらが情報ソースとして一番に視聴し、自らの外交判断の拠り所としたメディアがあります。米国の24時間ニュース専門チャンネル Cable News Network(CNN)です。設立からおよそ36年6か月あまりを経た2017年1月11日、そのCNNは、米国大統領選挙後の大統領就任前会見で、直接、「フェイク・ニュース」だと名指しされました。世界のリーダーが拠り所としたニュースチャンネルが、時間を経て信頼のおけないフェイク・ニュースへと変わってしまったとは考えにくく、むしろ現代社会においては、何が「真実」か、何が「事実」かについて明確に切り分けることが難しい状況にあると感じさせる出来事でした。情報には、「送り手」と「受け手」が存在して初めて社会の中でのコミュニケーションが成立します。情報を送る側は、受け手が興味関心をもてるような工夫をさまざま凝らします。情報の受け手は自分の興味関心があるものに接触する傾向があります。インターネット空間の情報は幅広い情報の受け手を想定して、より多くの人々の興味をひく形で示されているわけではありません。情報の選択権はネット空間にアクセスする人々にあり、自分好みの、または自分の考えや嗜好に合う情報に向かっていきます。自分が好まない情報は自分の意思であえて放置したままにし、接触しないのです。そのため、新たな視点や知識をシャットアウトして、余計なものが入り込めない泡のドームに籠ってしまうことができるのです。これを「フィルター・バブル」現象と呼びますが、グローバル化が進展する現代を生きる私たちは、バブルを打ち破り、目的をもって主体的に世の中の出来事を知ることが必要であり、その情報を分厚い教養の力によって見極めること、その上で社会的課題の本質に迫る議論やこれを解決するためのアクションを起こすことが望まれます。この時代にあって求められるのは未来につながる教養の力です。人類が歩んできた歴史・営みを縦軸とし、グローバル化する社会の横の広がり把握した上で、技術変革のスピードや情報過多が加速するメディア・社会環境に惑わされることなく向き合える、主体的な自分を支える対話・コミュニケーション力を身につけましょう。

■ 考えてみよう

- ・日々起きている世の中の出来事について、あなたはどのようなメディアを通じて情報を得ていますか。
- ・あなたが受け取る世の中の出来事にかかわる「ニュース」は信頼できるものですか。
- ・ニュースで示されている物事のイメージは、あなたの物の見方をどのように導いているでしょうか。